第四百五十一號目次

◎口繪
寡婦亡夫の墓に題す　ゼノア府墓地の一碑面彫像
◎社説
立家の基礎を氣長にすべし
◎家庭
火事のいましめ
西郷先生父母の家庭◎紅定氏の商道◎辨天の安子姉樣◎甘藷の料理(上)◎當今の發所
◎講義
夫婦アルカリの營養作用(下)　石塚左玄氏說
◎隨感
人才登用◎心外無別法◎親の慈愛◎皆佛性あり◎禮拜の主旨◎思ふだに懷しさ
◎文藝
書道の心得
案山子酒合社點取會詠(二)　池袋清風大人評點
◎兒籃
落葉　かも子
◎史傳
無傳の傳
◎雜錄
細民の狀態
小僞善者(下)
說新懲僞語（綏急の手心◎毒を救ふに毒を以てせむ）　曲浦抄譯
なにがし
◎時文
日本女禮式大全◎書法自在◎紅葉の錦◎海戰未來の夢◎雪月夜
◎片々◎時報

社告

◎本誌は每月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
◎十日發行の分は稍や簡易實際を專にし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。
◎單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば其望に應ずべし

女學雜誌定價表

前金	廣告料	送金
壹冊 價 金拾錢 半年前金 金一圓拾錢 一年前金 金貳圓（內國無郵税）代金は凡て前金の事◎前金切れの節は封皮の捺印にて御注意の上早速御送金有るべし	一行 一回(廿七字詰) 前金十錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引	爲替は東京四谷區麴町十一丁目郵便受取所に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ふべし

明治廿七年二月十九日　內務省許可
明治三十年十月十四日　印刷
明治三十年十月十五日　發行
東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚六百六十番地
發行兼編輯者　巖本善治
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十六番地
印刷者　島保藏
東京市麴町區下六番町六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話本局十九番）

女學雜誌出版書目

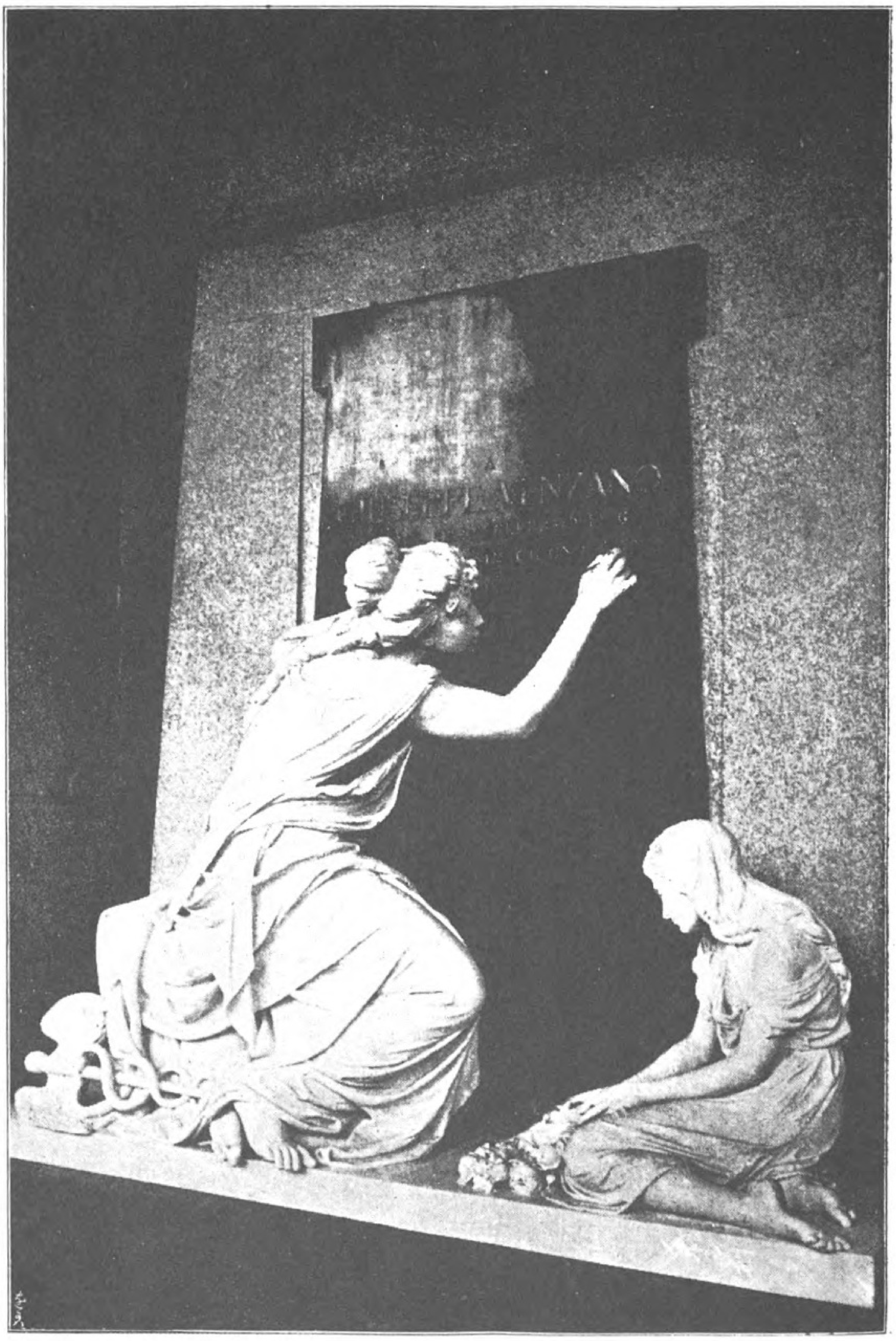
著者	書名	正價	郵税
櫻井成明譯	腓立比物語	金二十八錢	金六錢
巖本善治著	公娼可滅	金三錢	金二錢
同	教育講義	金七錢	金二錢
横山雅男著	婚姻論	金十二錢	金四錢
中島湘煙女史著	小說 善惡の岐	金十七錢	金四錢
島田三郎、植木枝盛合著	廢娼演說	金三錢	金二錢
炭谷小梅著	藝者と手掛	金二錢	金二錢
阿波鳴門左衞門作	戯曲 桂吾郎	金十錢	金二錢
松山高吉著	邦文學	金十二錢	金四錢
巖本善治著	吾黨の女子教育	金十錢	金二錢
若松賤子英文集	巖本嘉志子	金六十錢	金六錢
市川靜淵、小此木秀野合著	俳諧史傳	金二十七錢	金四錢
鈴木弘恭述	百人一首講義	金二十八錢	金四錢

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

[illegible]

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY



Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

大學雜誌

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第四百五拾壹號
明治三十年十月十四日發兌

社說

立家の基礎は氣長にすべし

早生は落易く、一時に成木せしものは倒れ易し。此の道理は人生万般に行渉りて變らざる所、また古來老功なる人の常に言ひ聞かす所なれども、人事暫らく天に勝ちて、僥倖の榮華暫時、浮世に時めく幻影に惑はされては、人の屢ば早路の進歩を冀ふこそ淺ましけれ。舊き物語に、兒童賽の河原に群遊して、小石をもつて塔を積み上るに、稍や成らんとするたび〳〵、鬼の來りて之を倒すと云ふ、現世に於ける大人の爲るとも宛ら之に似たり。礎を砂の上に築き、脆きセメントを薄くし、大惶てに急ぎて分外の石ころを積上げ、積上げては忽ち倒す可憐の痴態こそ笑止の極みなれ。つら〳〵觀ずれば、吾人ともに此般の過失に陷り易し、嚴に紀念して、斷えず警戒せざれば、誤を免れんと容易ならじ。かの松柏を見るに、成長決して迅速ならず、他の草花灌木が一時に出世して忽ち艶ある花を開くに較ぶれば、遲鈍迂遠、同日の比にあらず。然し乍ら、霜雪に堪へ、百年に續き、鬱たる美觀を數代に維持して、身倒るゝも尙ほ棟梁の材となるとを惟れば、初めに遲々たり、迂遠たりし如く見えしものゝ決して偶然に非ざるを知らん。一家の基礎も斯の如し。不義不正の富が永久ならざるは申すに及ばず、勤勉刻苦して非常の骨折を掛けざる身代は水の如し。之を賴みにして一時の醉を買はんとするは、愚も亦た太甚しきとなり。僥倖の富は消え易し、一時の運は轉ずると速なり、水ものの流れ失せざるは未だ曾て有らず。近くは十年二十年の經歷、遠くは一世二代の盛衰に鑑みれば、此の大道は歷然として明白なるとなれども、人は大抵目前の泡沫にのみ眩するものなり。たとひ又勤勉刻苦したりとも、我ひとり利益せんとしたる利己の結果は、迚も大なるものとなるとなく。又久しきに續くともなし。せち辛き浮世の風波にもまれたるものは、人情の反覆賴みがたきに失望し、此上

は只だ自分丈の用心を堅固にして、吾所有の手に万一の準備を爲すの外なし。自から金錢を握り居るより確なるとはあるまじきなど發明して、只管ら自己の收益を貯蓄するに忙しきものあり。左れど、此も亦た半面の人情を見て、他の半面を忘れたるもの也。古へより、我ひとり利益せんとして利益したるものはなし。たとひ一時は利益したる如くなれども、後に必らず奪はるるとあり。又、自己の利益したるものは即ち自己一人の儲けたるもの也と主張せば、單に法律上の權利義務は辨じたるやうなれども、其實、我一人の儲けたりと見ゆるものも、所詮は多くの人の手を假りて成就したるもの也。先づ我の利益したると同時に他に損したるものあるべし。我が一家の下女下男に至る迄で、人知らず、我知らざる微妙の間に於て、共同盡力したる助けもあるべし。一躰世間の文明の恩又は大勢の餘澤もあるべし。若し仔細に考ふれば一々此等の助力ありて初めて自己の利益も手に入りたることとなれば、深く心に謙遜して、其收益の幾分は他に割與する丈けの心得なかる可らず。即ち公共の爲に義捐もし、下女下男、出入奉公人にも相當の慈悲をかけ、世の沒落破産せしものなどに對して温き同情を寄する等は、苟くも一家の基礎を堅固にせんとするものゝ夢にも忘却す可らざるもの也。之は世間より見て心掛の良き慈善と言ふかなれども、實は當然の租稅にして、利益したるものの元來公共他人に寄すべき筈のもの也。斯してこそ初めて吾が取入を清淨にし、潔白の身錢を溜めて、万代安全なる世襲財産を造るとなるに、世の人屢ば此の微妙の情理を忘れて、吾が手に入りたる利益は元來皆吾物の如く考へ、之に對して、人の怨恨も添ひ、不平も蟠まり居るとに頓着せざればこそ、いつかは其の悪運廻り來て、遂に一家俄然として覆へるとのあるものなれ。」

夫れ、人は丈伸びしても疊一疊の外に出でず、山海の珍味を列べても、腹一杯の外に食しがたし。我一人丈けの所望を云へば、元來高の知れたるものなれど、或ひは子孫の爲に計り或は國家自治の要素を思ひて、家に多くの財産を蓄積する心持も起るものならん。左らば、其の土臺を堅固にして、代々決して變はらざる樣の安全に据ゑ置かんと大切なり。夫には丈夫なる地形を築くとひとしく、段々に積み上げて、脆きものを棄てゝ氣長に手を入れて、次第に上に重ぬる筈なるを、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

一旦の僥倖と切迫せる取繕ひとによりて、而も万代の礎を置かんとするは、抑も不當の注文に非ずや。

一都市、一町村に入りて、外來の旅客數日の滯留にも、直ちに耳に入る風評あり。某の家は吝嗇なり、某の家は心得悪しし、某の家は感心なるものと、世評自から定まりて亦た動かす可らず。未だ家號、符徽を知らざるものにすら、先もつて其家風の德操品格の直ちに吹聽せらるゝは驚く可きとならずや。試みに思へ、其家に對する敬意あると、侮蔑の情あるとは、万人の之に對する處作ぶりの上に如何なる變化を來すぞや。出入奉公人は更にも言はず、苟くも其門の下をくゞる惣ての人の心に、先第一に消しがたく拭ひがたき感觸を起さしむるの刺激は、家風の善きと悪きとの相違より來らずや。かの盜賊すら、某の家は殊勝なり、某の家は横着なりと知り居りて、其の憎らしき方には、一種の義に勇みて討入るほどのもの也。他の平人の情感すべて知るべき也。嗚呼既に万人に此の感觸を得させたる以上は、僅かなる金錢の損德に較べては物の數ならず、其の向背を轉ぜしめんと眞に難しと云ふべし。然るに、此等徴妙にして勢力ある人情の影響にすら毫も頓着せず、只だ自から取入れたる金を握り居らば、夫にて大丈夫なりなど思ふ人の、如何に世態人情に暗きとぞ。一面、世波に經驗したる如きが反つて身の仇となれり、人事を觀ずるの見方、思ひ様は極めて大切のもの也。

東京に近き地方に、聞えし金傑あり、元と高利の金を貸し、嚴しく取立などして巨万の富を成せり。近邊の怨恨淺からざりしと云へり。某年、家に婚事あり、一家千秋万歳を唱へて鶴龜の祝言を擧げし夜、何者とも知れざれど大方は盜賊ならん、押入て惣てを切殺したり。時に悲鳴叫喚の聲あたりに聞えざりしにはあらざれども、人遂に出で會はざりしと云ふ。之を本誌前々號に記載せし秋田の慈善家が、猛火烈風の間に一戸屹然として安穩なりし事例に比較し、如何に平素の心掛が、其の家の安全に關係するやの人情を酌量せよ。夫れ秋風落莫、樹葉もかれ、霜雪近づき、時は既に冬に接す。惟ふに之より火難盜難あるの季節來れり。もし人此等の事例に鑑みて實地に人情の影響を考ふれば、或ひは以て立家の基礎の氣長に堅立せざる可らざるの所以を悟らん歟。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家庭

火事のいましめ

季候は早や火災の恐れ多き時節とはなりぬ。冬は火を使ふとの多き上に風も烈しく、推迫りて貧苦の爲に火つけするものも澤なれば、火の用心尤も肝要なり。

●●●●●火災に四種あり。天災の火、類燒の火、放火、及び自から失するの火これ也。この中、自火は第一に殘念なり。大抵は預めの用心にて防ぎ得べきものを、覺悟の足らざるによつて災を發し、自から不慮の損害を蒙むる上に、人にも不測の難義をかけ、申開らきやうなし。火元は三代の怨を受くと申すほどにて、大勢の不平を一家に集め、罪の亡しやうもなし。苟且にも、疎忽、油斷等の故によりて失火せしむるなどの事あるまじきもの也。

●●預防は用心次第にて出來べし、たゞ心得を綿密にして、精やかに氣を着くれば夫にて十分なり。落度は不用心にあるとゆゑ、學ばざりしとて言譯とはなる可らず。手燭、提灯の如きものにても、蠟が流れて下に溜りたるか、蠟燭の立てやう確ならず、倒れて燃え移りたるなどより大事となるとあり。行燈は掃除を不勝にして、下皿にこぼれをため、紙に油をこぼし塵をかけ、丁子の落ちたる丈にてポツト燃上るやうになる迄で構付けぬものあり、危險は固よりの事なり。ランプは取わけ用心すべきに、心を古くして油のあがり惡しく、ホウケて下まで火のうつるやうになし、掃除も屆かず、風の入り惡しければ、暗しとて暴りに火を大きくし、其の儘放り置きて外出し、又は所々に持ありき、點じたるまゝに居眠りなどして災を起すとあり、之は自から火の手をあげるに同じ。竈は、灰の掃除あしく、火口高くなりて、燃木半ばごろに、ころげ出し、下のタキツケに移るとあり。火鉢は銅壺の下に瓦を入れるか、土を塗るかの怠りより、火氣底に徹し、燒ぬくとあり。櫻炭とびはねて火元となるともあり。ストーブ、煙實は、煤の掃除の惡しきより、出火すると尤も多し。巨燵は、布團の下に掛たるものの滑り落て、之より燃上ること多

し、ヤグラに結びつけ置く丈けの用心にて其災は逃るべき筈なり。マッチなりとて、火鉢に入れて、から〳〵になし、僅の工合にて五六十本一時に燃上るもあり、煙草の吹がらより火事を起すとも珍しからず、何れも、初めに用心すれば皆救ふことを得べきもの也。

●地震の時は、ランプを消し、蠟燭を點すべし。火鉢は外に出すか、鐵瓶を火の上に置くべし。ストーブは、火口を塞ぐべし。竈の邊にては、水桶の用意すべし。

●放火を防ぐには、常燈明をつけること。善き犬を飼ふこと。夜廻りを置く事。及び、平生慈善に心がけ、成べく近所の貧しき人にあはれみをかけ置べし。

●類燒の掛念ある時は、家根に人をあげ、手桶に水を入れ、箒たもたせ、火の子の落る時、拂ひ去るべし。風向は、出火後に變るものゆゑ、よく心がくべし。一人見せに遣はし、何處まで燒けしかと注意すべし。入口に高張の類をつけ、見舞の人に出す握り飯と茶との用意すべし。

●藏は直ちに戸前を閉ぢ目ぬりをすべし。目塗の土には、舊き糠みそを混ぜるをよしとす。かねて、此等の土は用意致し置べきもの也。

●消防に於る第一の心得は落付くこと也。既に失火したる后は、沈着して適宜の手段を施すの外あらず、惶ては何の甲斐もなく、甲斐の無き間に火の手は直ちに熾んになるべし。

先づ、防き得べきか、得可らざるかを見分けてのち手を下すべし。防ぎ得べくば、咄嗟に着手し第一に其方に從事すべきなれど、もし當座の人の手にては迚も適はずと見ば、第一に病人と老幼とを助け出し、次に夫々の品物を取り出すべし惣べて斯る際に落付かんとする時は手後れとなるやに思ふものもあれど、落付かずして騷ぎては彌よ手後れとなるべし。心の沈着に煙草一服位吹つたりとも決して損にはあらず、先づ悠然として見分し、而して后ち手段を運らすべし。尤も、行燈、手燭、提灯の類の出火は、直ちに揉み消すことを得べし。ランプ其他石炭油よりの。出火は、着物か、毛布の類にて靜かに覆ふべし。水をかけなどすれは、火いよ〳〵散亂すべし瓦斯が部屋に滿ち居るを知らず、フト火をもち入りて出火せんとすれば、直ちに戸障子を立きり、新しき空氣を入れぬやうにすべし。平生より、火事桶、消火器、水鐵砲、梯子、ポンプ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の類を出來べき丈け用意すべし。

●●●●片付及取出　には平常よりの心掛を第一とす。大切の書類などは非常持出の箱に入れ置べし。大切の道具、家の寶なども、別に置所あるべし。此等は第一に確かなる所に持たせ運はすべし。又は自分の立退く時もち行くやうに一まとめにし、雪隱などの内に入れ置くべし。箪笥には錠を下し、行李は繩にて縛る、錠と繩との置場は、平常より定め置くべし布團は其の上敷にて包むとの出來るやう平生より調へ置くを可とす。風呂敷の足らざる時は、着物の兩裾を雨のたもとより出し、中に包みこむやうにして、其の代用となすを得べし。二階又は高き處にあるものは忘れやすき、殊に注意すべし。價高きものを初に取出し、雜具は後にすべし。下女下男は、其の僅の持物に屈托して働きの利かぬものゆゑ、此等は皆燒かせて、あとにて償ひやることに申聞け置き、又十分に働かすべし。指揮せざれば、うろたへるもの也。就中外來の助け手は、如何にして手を出さんか、躊躇すらん。主人主婦は手を明ける迄にして、指圖するとを第一とすべし。尤も、曖昧なる助け手の多く來るものゆゑ、用心すへし。出したる荷物の置場所には、正直なるものを張番につけ置べし。扨て自分の立退く時には、一枚づゝ厚着をすべし。女は、手拭、紙、櫛、小き鏡などの用心あるべし。器は再ひ買ふべし、恥は一生拭ひがたし、女はかゝる際にも殊勝にありたきものなり。惣じて、危險は物惜しみより來るものゆゑ、取出すに、あまり慾張るとある可らず。烟に捲るゝこと尤も恐るへきものなるが、其時は、突伏して息を閉づべし、凡そ二三分間の辛棒にて、煙は上に立のぼるべし。此時決してあわてて走せ去る可らず。

●●●●他人の類燒　にかゝりたる時は、直ちに人を走らせ、又は見舞ひ、怪我の有無を問ひ、かねて不自由の品を察し、可成く必要のものを送るべし。第一には、手早く食物類を送るをよしとす。翌日も又送らんとならば、かねて其事を通じ置くべし。食物の次には、臺所道具。其次には、釘、箸、筆墨紙の類まで。身分によりては、金又は衣類を送るもよし。

六

西郷先生父母の家庭

一事より万事を推察せしむるものあり。錦繡は僅の小片にても能く其一と巻の美しかりしことを見めすとは云ふ。茲に西郷先生の父母の家庭を懷ひ起さする一事あり。

ある時、隆盛先生、弟從道君の假寓を訪はれしに、從道君あらざりしかば、其まゝ待合せて午時とはなれり。下女、晝の仕度をして、先生に膳をすゝめ、貧しかりし其比の生計とて一汁を供へたり。後れて從道君還り來り、兄君既に御飯を了られしと聞きて失禮を謝し、獨り膳に向はれしに、汁の味ことの外、鹽はゆく辛かりしとて、直ちに下女を叱し、かゝるものを兄上に進め參らせしかと言へり。扨て食事畢りて后ち、先生徐に弟君に言ひて曰く、汁の甘辛い、豈に一下婢を叱するの價値あらんやと。從道君、慚愧汗顏して陳謝せられき云々。

茲に其の兄弟の間柄の如何に麗はしかりしかを見、更に推して幼年の際、其の同に如何なる家庭に訓育せられしかの狀況を推諒するを得べし。父母日夜感化の狀態、髣髴として其の裏面に顯るるに非ずや。誰か能く其の消息を探る。

紅定氏の商道

芭蕉翁天下に周遊して民情風俗を考へ、商人道德の生粋を集めて之を近江商人に授く。今にしては、其の衣鉢を傳ふるもの紅定塚本氏の如き乃ち是か。

塚本氏、年々巨万の利を得て、衣服、住居、極めて質素なり。而して、近江地方百年の公共事業に盡力すると常に休まず。或ひは、山林を植ゑ、道路を直し、學生を教育する如き、其の一斑なり。去年四万餘圓の利を得、平年に比較して、一万圓の増加ありし。老主人つら〱思慮して惟へらく、ことし一時の氣運に寵せられて格外の收益を得たれば、若きもの等一同與に乘じて、來年は生平の心がけを緩べやせん、然らば則ち一万圓の利益は他日十万圓の損なりと。則ち、此の臨時の收入一万圓を擧げて悉皆番頭以下に配付し、嚴重に多年一樣の心掛を申し聞かせて、毫も家風の調子を狂はしめざりしとぞ傳聞す。

辨天の安子姉樣

北海道函館第一等の呉服商を岩舟と云ふ。もと越後岩舟郡よりの出生とて家名となせり。今の當主の養母が女の手一つにて仕上げたる堅固の身代なるが、其の少き時は、家極めて貧しく、風呂敷包を背負ひて、あちら、こちらに二三反の反物を賣ありくほどなりし。母に孝にして、一生、聟を迎へず、獨身にて只だ孝養をつくしたり。つれ合ひありて母への仕へ方疎となりては、本意ならずと言はれし。斯て、追々仕上げ、江戸、西京への仕入れも、女の身一つにて、當時交通不便の路を幾度か往來し、遂に仕上げて餘程の身代と爲しつれど、元を忘れずとて一生絹物を身につけず。奉公人は食物より外に樂しみなしとて、殊の外に馳走すれど、吾身は空恐ろしとて、常に粗食し、母を養はんとて二反三反の反物を賣りありき、人樣の同情にて、之を買て貰ひし當時の忝なさの忘られずとて、公共貧苦への慈善は第一に出金したり。之より今に至る迄、辨天の安子姉さまと人々言ひ囃し、其の俄出世をそねむものなど固より無し。數年前長逝せし今日に至る迄、土地の人嘖々として其名を傳へ、岩舟呉服店の身代は今いよく堅固なり。

甘藷の料理（一）

世はまた薩摩芋の時節となりにけり。蕃藷子の功德、人の口腹に豐ならんとす。さればいまこのもの丶料理法各種を示さんとて、天明三年版、浪速の珍古樓主人が輯むる處、甘藷百珍を取捨すると左の如し。

◎通常品の部

●(一)ふかしいも　ふかしいもの仕法は知れ渡りたるが、潮水をくみて蒸湯に用ゐるを甚だよろし。鹽の加減もこれに準ずべし。

●(二)もろみ漬いも　生にて切り、醬油のもろみ(醢)につける。切やうは好み次第。

●(三)藷の精　生にて擦し水に入れ、絹篩にてこし、其水を澄まし、底に沈みたる精をとり、水四五度もかへ、日に乾し貯へ置き、時に臨みて用う。尤も寒中の製を佳良とす。葛の代りに用うべし。

●(四)ひりようづいも　生にて卸し豆腐少し入れ、よく擂り、銀杏子、木耳、麻子、緑豆芽、陳皮末等加料に入れ、卸藷に包み油にてあげる、尤も加藥には稀醬油味付てよろし。

●(五)ソボロいも　生にて擦し、うどん粉少し入、つまみとりて蒸し、とりざかな、また煮物などの取合にすべし。

●(六)煎餅いも　生にて厚さ一分あまりに切り、日に乾し上げ、遠火にてむらなく燒く。また油にて揚げてよし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●(七) 燒藷 は丸にて灰の熱灰に埋め燒きたる最も味美なり。

●(八) 糟漬いも 生にてよき程に切り、糠味噌に一夜つけ、取出して酒糟に直し漬る。

●(九) 鹽漬いも 生にてよき形に切り、鹽水に漬け、九年母、烏賊(くろぐわゐ)などとり合せ、さりざかなによし。

●(十) 初霜いも 燒いもをあらき篩にて漉し、其儘何にても煮物のうは置にしてよろし。

●(十一) へぎ藷 丸むきにして小口より、ひら〳〵とへぎて、煮物、すひもの、の取肴などによろし。

●(十二) いも冷物 生にて花の形など好み次第に切り、水にひやしてよし。

●(十三) 藷三杯浸 生にてよき程に切り、酢一合、酒一合、醤油一合の割合にて煮かへし、丸唐辛一ッにいれて浸ける。

◉奇品の部

●(十四) 蒲鉾いも 生にて擦し汁氣を去り、麵粉少し入れ、板につけ蒸すべし。むしあげて罌粟かまたは青海苔の粉を付けて小口より切る。また五色の中好次第色をつけるもよし。色付法は(三十一)を參考すべし。

●(十五) ちくわ蒲鉾いも 生にておろし汁氣を去り、麵粉少し入れ、竹に卷きて蒸すなり。むしあげて酒を塗り、火にかけやき目を付け小口切にす。

●(十六) 海苔卷いも 丸にてむき皮を去り、かな篩にて漉し、淺草海苔を展べ、その上へ厚さ一分位にむらなく延ばし、小口より卷て切なり。

●(十七) 昆布卷いも 生にて卸し、うどんの粉少し計り合せ棒の如くとりて、上を極上の青昆布にて卷き其上を竹の皮にて包み糸にて括り蒸すなり。

●(十八) 板家氷餞いも 生にて厚さ一分程に小口よりきり、武力または銅にて作りたる丸き筒にて打ち抜き、丸き形にとりて、焙爐にかけて菓子に用う。

●(十九) 御手洗いも 生にて卸し麵粉少し入れ、金柑の大さに取りて蒸あげ、青竹の串に、五ッ宛さし砂糖醬油つけやきにする。

●(二十) 茶巾いも 蒸あげて馬尾篩にて漉し、好み次第に色を付け(三十一)布帛にて程をきめ包みて捻る。

●(二十二) 苞苴いも 生にて卸し、麵粉を少し入れ、蒸揚げて、棒の如く取り、竹の簀に卷き、暫時おきて取り出し、調味好みに隨ひ用う。

●(二十四) 結びいも 生にて卷むぎにして又茜の如くに卷きて、小口切に細く切り、稀醬油を煮たゝせ、右の藷をさつと煮上げて、わさ結びに結ぶ。手早くすべし隙どりては切るゝなり。

●(二十五) 友卷いも 大きなる藷を生にてむき、ざつと湯煮し、又蒸藷を馬尾篩にて漉し、さきのむき藷の上にのばし、小口より卷き小口切にす。漉し藷を色付にしたるは、猶々よし。

●(二十六) 卷餡いも 隨分大きなる甘藷を生にてむき、ざつと湯煮してひろげ、其上へ飯を二分程の厚さにむらなく一面に置き、其上に蒸藷の馬尾篩漉を、紅染、青粉染、鬱金染三色にして、摸樣どりよろしく置き並べ、小口切より卷き、布帛につゝみ、緊とかためて小口切にす。

●(二十七) 切餡いも 生にて方に切り、夫を竪に五厘ほどの厚さにへぎ、ざつと湯煮し、鮨桶に竹の皮を敷き、右のいもをひしと並べ、常の鮨の如く飯に加料好次第交あはせ、いもの上へ三四分位に置き、また件のいもを一遍置き、又飯又いもと幾重もしきて竹皮にておさへ、壓を掛け、鮨のやうにきりて盛るなり。

●(二十八) 豆腐皮卷いも 前にいへる海苔皮いもの製法に同じ。豆腐皮を水に浸し置きて板にのばし用う。

●(二十九) 罌粟まぶしいも 生にて卸し蒸して圓く取り、罌粟にてまぶす。紅染の罌粟を用ゐてよし。

●(三十) まくりいも 生にて卸し、麵粉少し交せ蒸して、打のばし、味噌をよく擂り其上へ一分程敷きて小口より卷きてきるなり。

●(三十一) 色付いも 何色にいも蒸いもの馬尾篩漉したを用うべし。◎赤色は食用紅を押し交ぜて淺紅深紅好みによるべし。◎青色は青粉を押し交ぜてよし。◎黑色は鍋墨を用う。◎五色に染むる時は、黑色を染て、紅と青粉とを交ぜ合せ紫色を作るべし。◎白色は藷の精にて色付る、至つて白くなるなり。◎黃色は山巵子(くちなし)をきざみ、水に浸し、その汁を交ぜてよろし、以上のいろ付の藷五色とも小さく圓め、色をせり合せ菓子に適ふて甚だよし。尤も砂糖を交ぜ合すべし。これを五色いもといふ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

當今の臺所

料理の品々

◎梨子の粕漬　梨子の疵のなきものをえらびて、桶に酒粕を充分いれて、梨子と梨子とがあたらぬやうにして漬るのです。

◎柿の粕漬　柿のまだ青きものを取りてへたを離し、夫れを酒の粕にて漬けるなり、澁氣は自然にぬけて味ひ甚だよろし。

◎生姜の味噌漬　秋のすゑ生姜の根ばかりをよくあらひ、生姜一貫目に鹽五合ほどの割合にて鹽壓をし、水の揚りたる時、一日ほど日に干して乾かし、扨て味噌に粕を一割ほど混合して生姜を漬るべし。

◎芋の白味噌汁　小粒の芋を丸粒のまゝ白味噌にいれて煮るのです。其味噌をときくには鰹のだし汁を用ゐ、又白味噌汁の中へ粉山椒を振り掛けます。

◎松茸と豆腐の清汁　松茸は竪に薄く切り、豆腐もよき程に切りまして、いつしよに清汁にいれて煮るのです。又椀につけてから淺草海苔を少し揉み込みます、吸口には柚子がよろしい。

◎生芋の三ばい酢　里芋を生のまゝ薄く切り（一分位）之を鉢に入れて少しの間水に浸しておくと、粘汁が出ます。でましたならばその水を捨てゝさらに水を二三べんそゝぎかけてその粘汁をのけます、まだ芋に粘汁がつきなりますものを、布巾で拭ひてから之にざつと鹽をふりかけて三ばい酢につければよいのです。

◎此節美味の野菜物、果物、

蕪菁、松蕈、初蕈、しめじ蕈、まいたけ、松露、きくらげ、秋梨、柿、梨、棗、新くるみ、新かやの實、胡麻、ぎぎく、栗、椎蕈、すゐき、新くはゐ、銀杏、生姜、細根大根、人參葉、玉葱、里芋、さつまいも、百合根、柚、ぼうふ、しんぎく。

同じく魚介類

ぼら、かじき、生鮭、さば、かじみ鯛、まてたひ、かれたゝき、きわこだひ、車だひ、かます、なまこ、いなだ、さはら、こはだ、ほや、

講義

夫婦アルカリの營養作用（下）

（陸軍藥劑監石塚左玄氏の説）

◎米穀は原來搗きて白くすべきものに非ず。上々の白米の如きは、玄米の甘皮を全然剝脫して、米の主要成分なる鹽分を失ひ、單に蛋白質のものとなすにて、其味ひや美にして口に適すと雖も、人躰の營養に必要なる夫婦アルカリの作用を起すべきものなし。

◎飛驒信濃白山近傍の雪中旅行者及び郵便脚夫は、防寒用には必ず玄米を携へて、五六粒ツヽ嚙みながら歩行すれば、身躰に温氣を生じて凍死を免るといふ。白米にては此効なし。

◎麥は之を搗白するも、容易に其外皮を全く脫離せしめ難く、且つ本來加里鹽に富むを以て、之を食すれば、脚氣其他の疾病を治するの効驗あるのみならず、無病強健の長壽者は、都會城市以外の山野人麥食するものに多し。然れども大

麥の極細粉より製する上等食麵麭の如きは、加里鹽の量最も少きを以て、挽割混食の麥飯よりも、其効用劣等なり。（編者曰く米の脚氣病原因をなすとは、榊順次郎氏の說に見ゆ。）

◎古へより病者に用うる『おもゆ』は、今日にては上白の飯米、或は太白の米飯に湯水を注ぎて、煎し出したる汁をいへるも、これにては、元來、米の主要成分にして、病者の必要なる鹽分を除去せし白米の煎じ汁に止り、それにては、純然たる澱粉質より製せし米糊の汁と一般にして、効用なし。昔は玄米を炙りたるもの、または玄米より『おもゆ』を取りしなり。之には加里鹽を多有するを以て、却病保生の効益あるなり。

◎鷄卵と昆布とは、滋養の効用殆と同じきものなり。鷄卵は上等の滋養品なりと稱すれども、其實決して然らず、之が有する夫婦アルカリの差數は甚だ近きに在るを以て、脚氣或は熱病者の快復期にある者の鷄卵と、食鹽を加味したる白粥とを食すれば、回復の期を遲延せしめ、且又時としては、惡疫を特發するとの患ひあり。

◎昆布は不消化物なりと稱すれども、之を食するに筍及豆の如きものと混じて煮染とすれば、甚だ美味にして、滋養の効驗多し。

◎酒宴に臨む一二時間前に、大根或は蕪菁、または胡蘿蔔の卸したるものか、若しくば二十匁内外の果物を食し置かば、比較的に多く飲酒し得らるゝのみならず、惡醉をするの患少なし。

◎强大なる喉音を要する義太夫語りは、那篤倫鹽の多き食物を要するものにして、其名人といはるゝもの、出生地も亦、大坂、阿波、淡路界隈の多鹽地に多し。之に反して、長歌、常盤津などにて、癇の聲を使用する藝人は、加里鹽の多き食物を要して、其名人の出生地も亦遠海之鹽地方、例へば宇都宮野州及び東京の山手人に多しとぞ。若し遠海地なる西京等にて淨瑠璃の名人出るあらば、そは多くは艶物を語るものにして、端歌、新内、淸元などの名人は瀕海多鹽地の大阪、阿波、淡路よりは出ると少し。

◎加里鹽多き山地人は槪して靜肅の氣性なるも、食鹽多き濱邊人及び魚河岸人は、躍起の性質を有するが如し。

◎小學列女傳に曰く古は婦人子を姙む邪味を食はずと。水

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

野澤齋翁の養生辯中に其邪味を解說して曰く、鹽を過食せば、腹の胎の臓を傷りて生長の後力弱く娶りて子なしと。

◎齒牙の堅良なるは加里鹽多有の蔬食者に多く、其不良なるは、那篤倫鹽多有の肉食者に多し。

◎朝鮮國王は現に毎朝童便一碗を進ぜられ、同國人は瘡面の疼痛部に牛馬の糞若しくは人糞を貼布するとあり、これ即ち不知不識加里鹽の作用によるものに外ならず。

◎鰌を烹るには、鍋中の冷水に大形の豆腐を入れ、之に鰌を放ちて、下より火熱を漸次に加ふれば、鰌は水温の高まるに從ひ、豆腐中に互に闖入し、之を破開して死するに至る、此時間中に夫婦アルカリの包合作用を起すなり。其後種々の調味品を加ふれば、味最も美にして常法の酒にて殺す鰌汁の如き比に非ず。

◎子弟の勉學中は可成肉類特に魚類就中青魚族無血海族を少食し、鹽味の強きを取らしめず、蔬菜を主とし、果實類を時に食用し、折々の精進日を勵行せしむべし。

◎敏活の才は多鹽地に生じ、深廣の智は乏鹽地に生ず。智は加里鹽の多き古人に若かず、才は那篤倫鹽の多き今人に如くはなし。

◎統計上長壽者は穀食者に多く、肉食者に尠し。我邦上古の醫治法は神遺方即ち和方とて食療修養を以て第一とし、服藥之に次ぐの却病保生法なりき。これ蓋し我邦地形天然に適合したる衞生法にして、其法たる暗々裡に加里鹽を多くして、那篤倫鹽を少くするの食品撰定法にてありき。今日の醫家、強ちに此和方を排して、風土を異にする泰西の醫療法を直譯的に輸入せんとするは誤りなしとせず。

◎世の開くると共に人命の短縮する事の原因の最も主なるものは、食品の漸次加里鹽を減損して、那篤倫鹽を多くするの傾向にてあるべし。米は漸次工夫に工夫して其甘皮を脱却せられ、醬油といへるものも、昔は味噌の溜り汁にして、加里鹽を多有せしものなれども、今日の醸造法にては、那篤倫鹽の極めて多きものとなれり。茶もまた番茶を焙じて煮じたるものは加里鹽に富むと雖も、漸次に上茶の需用多くなり、焙ずることなしに、たゞ浸し出すものとなりたり。往年長崎に來りし外醫ボードイン氏が、日本に腎臓病の尠きは番茶を飲むに由るといひしも、今は其特効も減じ行くさまなり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

◉東京府下第一の高齢者清水トウといへるは、本年百十歳に當れり、南足立郡江北村元沼田の人なり。此人の常食は挽割麥飯に通常の野菜を添へ喰ふこと百年一日も變ることなく、酒と煙草とは毫も之を嗜まずといふ。

◉虎列拉病は一種の鹽中毒なり、之を制し、また之を未發に防ぐには、加里鹽の多用を必要とし、赤痢の療法また加里鹽を緊要とす。ジフテリヤ（馬脾風といふ）の治療には、馬糞の搾り汁を服さしめ、又は野蒜の黒燒を咽吭に吹きかくるごときは特効あることは實驗にて明かなり。

◉腐着の襦袢シャツなどは、那篤倫鹽性の曹達にて洗濯するよりは、加里鹽性の灰汁にて洗濯されば、脱鹽の妙法となりて、暗々裡に却病保生の助けとなるべし。

◉和方、漢法の治療必ずしも却くべからず、洋方文明の醫法盡く信ずべからず。國の風土食物によりて、大に醫療衞生に差異を來たすべきは當然なり。

◎人類は息災延命の身躰とならんには、鹽食動物たらずして穀食動物となり、加里鹽の多き野菜果物を熟食せざるべからず。若し此資性を忘却する愈多く、愈遠く隔離して知らず識らず、加里鹽を少く、那篤倫鹽を多くすれば、則ち才子多病に不幸短命に歸するものなり。

附記　本講義はこれにて一先完結なしたるが、本論の主唱者石塚氏は、以上を別に小冊子に印刷して廣く頒たるゝの企あるよしなり。

隨感

○人才登庸

老子曰く、賢を尙ばずして民諍らずと。人才登庸は人才を登庸せざるには優れど、之を登庸して而して人才登庸を名とせざるものには劣れり。凡そ政道は大綱を提ぐるを要とし、巧智速成を不可とす。一時の人氣を引立る如きは、相場師の爲す所なれども、大政士の決して爲ざる所なり。茫々漠々として際涯なく、其の形跡を見ず、其の功業を見ず、其の名を聞かず、而して能く實地の擧るものを上政とは爲す。莊子

屢ば大仁は仁ならずと言ふに、人其の眞相を見ず。老子、天地仁ならずと言ふに、人亦た之を空論とす。夫れ老莊の政治豈に空論ならんや、所云る自治政躰とは即ち此の謂ひ也。今や年少氣鋭の政客切りに改革を口にす、われは其の行はれざるを知る。改革の名の行はれたる時は既に改革にあらざれば也。嗚呼、人才登庸の名ありてより、人、才を重んじ、或ひは自らの才を比較す。前后に顧眄して、運來らずやなど密かに時待貌なる人の可笑しさよ。

○心外無別法

心外別法なし、之ありと言ふものは躬から責めざるによる。淺墓にも哲理を弄びて、釋尊慈愛の敎訓を批評し、心骸の解剖を旨とする性理學などによつて、聖賢修道の覺悟を論はんとするこそ笑止なれ。人もし審かに省みて、事の因縁を究極すれば、悲しき事、うれたき事、痛ましき事、悪ましき事などの總じて、吾が不束より發作せざるものなき所以を悟らん。躬から責めざるの結果は、自から歎くとの永久止まざるに了る。六道の輪廻は現世にあり。應報賞罰、歴然として一身に存す。夫れ誰をか恨み誰をか責めん、獨り膝を抱いて、つく〲と惟みれば、人生の榮枯、念頭に存し、一代の盛衰、眼前にかゝる。大慈悲、大敬虔のこゝろ、油然、勃然として先づ吾心に鬱起するにあらざるよりは、夫れ將た世。改革論なるものを如何んせん。

○親の慈愛

われは錢湯に浴して、髯いかめしき父親が、若兒を膝の上に枕らさせつゝ其頭らを洗ふ樣を見て、ホロ〲として涙下るを覺えざりき。錢湯の歸るさに、ふと、恐しげなる大犬が、小犬をかき抱き、長き舌を出して、其毛を甞め、子犬がゴロ〲鳴きて喜びつゝある爲躰を見、憮然として長歎し、歸りて後ち樣々にぞ思案しける。

○皆な佛性あり

誰か人にのみ靈性ありと言ふ、一切の草木亦た佛性を具せずや。枝を折りて風流とし、花を摘みて歌をよむ。騷客、銀聲に朗唱するの時、雨はら〲として降る、天は泣くにあらざ

る乎。杜鵑一聲、鳴き過すの際、浮雲情を寄せて曇る。月影、水に下りて、水之を抱く。虫聲啣々、草すこしく動き、樹葉亦た和す。何ぞ獨り人間にのみ靈性ありとせん、時としてはわれは其の尤も無情なるにかこつ。

○靈拜の主旨

吾、平安を汝等に與ふ、吾が與ふる平安は世のものと異なるとは仰せ玉へり。宗教信念の結ぶ所の果は固より平安なるべし。平安を求めて宗教の門に入り、平安の果を獲て宗教の堂にあるを覺る、同もに可なり。されど、平安にもとむるの主旨必らずしも其の極致にはあらじ。たとひよし宗教の爲めに一生の不平安を來すとするも、靈性を研磨開發するは、即ち其の主要ならずや。人とし靈を長ぜざれば、土芥にひとし。三寸氣息たえて、只だ塵に歸す、悲しからずや。盜跖も孔丘も一樣の土と化すれど、只だ其の靈の長幼によりてこそ差別はあるならめ。左れば、靈性の修養を旨とせざる宗教は、平和を買はんとするに異ならず、亦是れ一種の慾、只だ商ひすると何ぞ擇ばん。神は靈なれば、靈として拜すべし。此の靈拜の處即ち宗教あり。

○思ふだに懷かしき

樂しきは何事ぞ。曰く、愛する時なり。愛ありとも偏する時は胸の苦しきこと多し、如何ぞ常に樂しからん。左れど若し博愛大慈にして、一切の人に愛思を寄することを得たらんには、心中爽然、樂しきこと抑そも幾何ならんか。吾子を愛すればこそ、其立身出世は一々に吾が樂しみとなれ。世上万人の立身出世を、吾子に於ける如く樂しむの愛あるを得ば、其の樂しみ如何計りならんか。むかし大教祖の御胸中には、衆生を子として見玉ふが故に亦た子として見玉ふの御苦しみもありつらめど、さりとても亦た子として慈くしみつゝ其の成長を見玉ふの御樂しみは如何なりけん。思ひ測るだになつかしき哉。

久方の月の桂も秋はなほ
紅葉すればやてりまさるらん

文藝

書道の心得

◎書には十體あり、即ち古文、大篆、小篆、古隷、八分、草書、章草、楷書、行書、破體是なり。

◎書體には各種あり、書風には支那日本共に其流派多しと雖も、要するに文字は、結構の釣合よろしきを得るにあり。釣合よろしからぬは不具者なり。

◎習字の順序は第一に點畫とて、文字の一點一畫を習ひ、次に結體とて點畫を組立て、字體を習ひ、次ぎには連綿とて文字を連續せしむることを習ひ、次は緩急とて運筆の遲速輕重を習ひ、次は變化とて字態の變化及び筆意の變化を習ふ。此等は書を習ふ初歩の心掛なり。此後は古人名家の筆意筆法を取捨して自得すべきなり。

◎習字には身躰の構、行儀正しきを要す。また文字を書くには一點一畫何も注意すべきは當然なれども、初の一筆と、末の一筆とは、殊に大切なり。

◎筆法に就きては古來いろ〳〵の説を立つるものあれども、大方は、弘法大師の三筆法といへるを心掛け居ればよし。其三筆法とは、

第一　枕腕　とて左の手を右の手の下に枕す、細字を書くの法なり。

第二　提腕　とて、肘を卓につけて、腕をあげて書く、中字を書くの法なり。

第三　懸腕　とて、腕をあげて、宙に浮かして書くなり。これ大字を書くの法なり。

◎執筆法に就ては、雙鉤とて、拇指と第二指と第三指とにて筆を押へ、餘の指を支へとする法、普通なり。此外單鉤とて、拇指と第二指にて持ち、餘の三指を支へとなす法あれども筆力充分ならざれば小字にのみ用ゐ、また和方にては假名書に用う。昔は習字の稽古には、掌に卵子を抱かせて、執筆の恰好を執らしめたり。

◎晉の衞夫人は高名なる書家なりき。夫人曰はく、眞書を書くには、筆頭を去ること二寸一分、行書と草書は三寸

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一分に筆を握るべしといへり。

◎習字は先づ眞書を心得て後、行に入り、行より草に入る。未だ眞書する能はずして行書をなし、未だ行書する能はずして草書するは、未だ立つと能はずして行き、未だ行くと能はずして走るが如しと蘇東坡もいへりき。

◎字を習ふには、良き手本を得て、之を見て習ふを臨書といふ、これ第一の法なり。おのれの手癖より形の似つかぬものは、手本の字を布き寫しにして、其上に幾度も習ふべし。これを摹書といふ。臨書は古人の位置を失ひやすけれども筆意を得ると多く、摹書は位置を得やすけれども、筆意を失ふと多ければ、臨書、摹書、兼ね到りて、位置筆法共に會得するやうに稽古すべし。

◎王羲之が曰く、書の妙道は神彩を上とし、形躰之に次ぐと、書道の上に最も心得とすべき語なり。

◎我朝三蹟の一人行成卿の書道に九事の傳といふものあり、それに曰へらく、

第一　筆ふるきは、のぎ（芒鋒）切れて心かなはず。

第二　紙は新しきを用うべし、ふるきはあし。

第三　硯に水を貯へて用うべからず。

第四　水は早朝汲みて用うべし、久しく水瓶に貯へたるはあし。

第五　墨は古きに從ひ、光をいだしてすみやかなり。新しきははねばる。

第六　腕をつかひし後、筆を執るべからず。

第七　心身定まり、心ゆるくして書くべし。

第八　ねいきよくさまし、早朝に書くべし、文字分明なるべし。

第九　天氣はるゝときは、心爽かなり、空曇る時は心鬱す。雨天には文字も其心より出る故死すべし。

◎墨のあまりに古きものは、膠の氣去りて字光なく、またあまりに新しきは、膠氣おほし。墨は綿または新しき繭につゝみて保存するをよしとす。

◎硯やはらかなれば、墨を輕く磨るべし。硯かたければ、力を入れて磨るべし。

◎筆の保存法は、夏は鞘をさゝず、冬は鞘をさし置くべし。常は鹽湯にて洗ひおくべし。毛やはらかになり、虫くはずし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

てよし。

◎紙ふるくして、墨付あしき時には、白水を入れて磨るべし、また色紙、蒔繪、金箔、ぬりものなどの上に書くとき、墨付かすんば、もち米の粉を入れて磨るべし。

◎額面、聯、卷紙、短冊、懐紙などには、竊に習ひ直くべし。實地に臨んで、氣おくれ、恰好あしく、平生能書の者も、見苦しき書樣となるなり。

◎筆は、秦の毛恬が作り始めしよしにして、毛恬其功により て管城に封ぜらる、之より筆を管城といふとぞ。筆の異名に種々あり、管城、霜毫、銛鋒、染翰、銀管、鼠尾、秋兎、文毛、紫毫、君象、栗尾、猩毛。其の製法にも種々あり、書流によりても之を異にす。

◎墨は、孔子の門人子路はじめて之を作り初むといふ。古へは松のかゝりを集め、膠を以て固めて使ひしなりど。後代に至りて油煙を膠にて固め、種々の香料を加ふるとになれり。

◎墨の異名、玄香、麝媒、玄泉、烏金、玄雲、蛾綠、客卿、陳玄、烟氷、赤松、珠麝、松煙。

◎硯は黃帝珠を以て之を造らしむと傳ふ。唐硯中にも端溪の硯は、書家の最も重んずる處なり。我國にては近江の高島石、山城の清瀧石、長門の赤間石など名あり。硯の異名、墨鶴、紫石、龜首、墨洞、魯石、地銀、馬蹄、玉地、龍尾、併鶴、墨潤、淘泓。

◎紙の異名 楮兒、竹帛、魚紙、玉板、白麻、美雲、村葉、陟釐、拾式、今花、藤皮、蠟紙。

案山子迺舍社點取會詠 (池袋清風大人評點)

大坂第一社

、田家立秋　　大島榮子

此朝け
いなご飛ぶ門田の稲の走り穗の露ふきはらふ秋の初風　こぼす

評　蝗飛ぶの形容、此所には別に益もなきやう也。

、海邊立秋　　仝人

汐あみにつどひし人の影たえて秋風たちぬ須磨の浦里　濱

評　近年の實景也、空しく古歌の作例にのみ依賴して題詠する人はよむ能はず、そは作例になければ也。詠者は須磨に別莊あり、臨時行きて實驗せり。昨夏評者須磨の海浴に趣きしも詠者の周旋に依る。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

、初秋露　同人

ふく風の身にしみそめし朝より草葉の露もきのふには似ぬ

評註　和歌にて身にしむとは、肉躰に寒さを覺ゆる事とのみ初學者若くは和歌を識らぬ小説家文學者などは心得たるやう也。されど歌人の古來詠ずる意は然るにあらず。即ち寂しく又悲しく情に感ずる事也。是は十年前予嘗て和歌論に詳述せし故、斯に贅せざるも、讀者に注意を與ふるのみ。下句の意は昨日までは唯涼しく見ゆるのみなりし露も、何となく冷氣を帶び、身にしみて悲しき秋情を發するものなれば、かくよめり。初學の爲に一言を附す。

、招靈祭　池袋節子

魂まつる今宵は來てもうけぬらん遠つみおやの影は見えねど

評　一種敬念の情あり。

、同　茂木鶴子

此夕岸のこなたにまつる也なき魂わたせよみの川をさ

、蜩　同人

夕日影見わたす限り寂しきに又山陰にひぐらしのなく

評　さびしきにて一理屈は言へり、此上に又とくれりては高尚に疵つけ陋しくなる也。

、初秋荻　池袋節子

秋來ぬと告る人なき宿なれど荻の上風おとづれにけり

評　平凡評するまでもなし。

、荻風驚夢　茂木鶴子

こよひはといぬれど荻の上風に驚かされぬ夜半とてもなし

、月前荻　同人

村雨のふりしと見しは夢ならん荻のうは葉に月ぞかゝやく

評　評者の詠に　月てりて風こそわたれ村雨のふると思ひし窓の荻原に　類似して優劣如何。

、、走馬燈　池袋節子

おはるともおふとも見えてうつし繪の影おもしろし軒の燈

評　題のむつかしきに比べてはやすらかによめり。誰も走馬燈なる事は題を見ずとも知るべし。

、同　茂木鶴子

をさな子がもてあそぶなる燈もめぐりて早き世をぞしらする

評　詠出の儘にては唯はやき世といはん爲の形容辭のみにて、をさな子の益も燈の詮もなし。添删にて上下の縁は生じたれど述懐の意主となれり。

、、秋のはじめ一人の子を先だてたる人のもとによみてつかはしける　大島榮子

たのみてし桐の一葉のちりしより秋風いかに身にはしらむ

評　ちるとは小さき物の多く落ること也。桐の葉は大にして且一葉なれば宜しくおちしなるべし。此詠用辭も整ひ情も適切也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

、月下蓮　　堤鈺太郎

蓮葉の上に（露の）おくなる白露にきらめく（玉ふく風にこぼるゝ）月の影の涼しさ

評　趣向既にありふれたれど涼味猶存す。

兒籃

落栗　　かも子

先づさる所に太郎さんといふ兒と、また其隣りの内に、次郎さんといふ兒とがありまして、兩人は隨分の仲好しで、二人連れて、よく其處等散歩してゐます。或る時、丁度今時分のやうに、初秋の風がソヨ〳〵と吹き、野山の景色やうやくに面がはりして、日中とても寒くもなし、暑くもなし、朗かな十月小春の天氣、散歩には持つて來いといふ好時節に、此太郎、次郎が二人して、近まの野遊に、運動に出かけました。

『四百餘州をこぞる』だの『敵は幾万』だのいふ軍歌を、聲を合せて、勇ましく歌つて歩いたり、道々海軍と陸軍と、どちらが強い。僕は海軍の方が強いと思ふよ、でも君、定遠を沈めて、鎭遠を分捕りしたではないか。イヤ僕は陸軍の方がエライと思ふよ、平壤だの、旅順口だのを滅ぼしたちやもの、原田重吉なんて、強い兵士が居るもの、などと力み込んで話しを為ます。クリスマス、御正月などの話しも出て來ます。扨て段々と往きました所が、其所にコンモリとした藪がありまして、垣根の處に、毬栗が一つ落ちて居りましたので、二人が同時に之を見付けて、

『ヤ、毬栗が落ちてゐらう。』

といふて、次郎が、いきなり、袂でもつて、さも痛さうに、拾いました。所が此處で、今まで中の好かつた二人の間に何たる事ぞ、一場の爭ひが起りました、太郎が、

『僕が先き見付けたんだ。君一人で取るなんてひどいや。』

『何に、僕が拾つたんだ。』

僕のだ、いや僕のだと、タッタ毬栗一つで爭ひが收まりません。處へさして、向ふから時節柄、小鳥打ちに出掛けて來た

一人の年の若い人が、洋服着て鳥打帽子被つて、村田銃擔いてゐさうな、ヒヤッ／＼栗を、どうするかと思ふと、彼人はで、參りました。これは二人が見知越の人でして、

『なんだお前達は、友達の餅に、なにを爭つて居るのだね。』

『あの毬栗を僕が先に見付けたのに、次郎さんが、拾つて仕舞つて呉れないのだ。』

「なに僕が見付けて、僕が拾つたんだ。』

『そんなケチなことをいふて、爭つてゐるのか、それぢや、わしが、よいやうに裁判してやろ。次郎さん、其毬栗を一寸借して御覽。』

次郎が、渡しますと、此人は、夫れを地べたに置いて、鐵砲の臺尻で割りました。太郎と次郎とは、此人はヒドイことをすると思つて、ビックリして見てゐますと、毬殼を半分づゝに裂いて、

『まあこれを一つ宛、持つて御出で。』

といつて二人に一つ宛當てがひ、そして又、中から出した二つの栗楔を一つ宛やつて、

『こッつも、一ッ宛持つて御出で。』と

といつて、偖て、一番大きくて圓つこくて、實の澤山這入つてゐさうな、ヒヤッ／＼栗を、どうするかと思ふと、彼人はヒョイとそれをカクシの中に入れて、

『これや、余が裁判して上げた貫に貰つて行くよ。イヤ御馳走さま。まあ二人とも仲好して、モット遊んで御歸り。』

といつたぎりで、ズン／＼先きへ往つて仕舞ひました。二人は呆氣に取られて、一處に

『何だ、ツマラナイや、今迄爭つたのが損だ。』

『次郎さん、モウ歸らう。』

『太郎さん、晩に僕の内で幻燈をして遊ばう。』

『そいつあ、愉快々々。三郎さんも、四郎さんも、お梅さんも、お花さんも、呼んで來ようや。』

◎瀬戸かけ鍋

瀬戸かけ鍋とは、鍋の内面を瀬戸で塗つたもので、金氣も出ないし、一寸奇麗ですから、よくなんでも煮ますが、アノ鍋で酢や酢のけのあるものを煮てはいけません、その内面の瀬戸のやうに見えますものが、實さの瀬戸でなくつて、中には鉛なごの混りてゐるのが澤山あります。酢を沸しますと、酢のためにその鉛なごの毒が溶けまして、人の身體にわろいです。

史傳

無傳の傳

大仁は仁ならず、大功もと名なしとかや。わけても、婦女子内助を重んずるの身にありては、賢女貞婦の名は公けにきこえんこと、本來の主意にはあらじ。もし功あらば、其の男子の手にて成させつべし、もし得べき程の名あらば、之を其の男子にこそ得さすべけれ。女は終歲、内を守り、裏面に助けて、其光を蔵み、其名をかくさんこそ、いとも麗はしくはあるめれ。むかし老莊切りに此邊の心得を論ぜしが、古來眞によく此の心を躰して實地に之を行ひ得たるものは、乃ち唯だ婦女子たる可き歟。

左れば、ありふれたる傳記世話に名の聞えたる有名の婦人は元來、其の名の斯までに聞えんことを、當人の望みとせし所にあらず。申さば、偶然の變態にして、女道の常にあるべきの事と見做す可からず。此故に、之を奬勵するものも、亦、之に倣はんとするものも、先づ以て其の本躰に學ばんとすることを主旨とし、徒らに、其の結果の末に拘泥するなからんことを要とすべし。

今の人、充たすことを思はずして散らすことを先とし、包むことを力めずして露はさんことをのみ希がふ。喩へば、自から盈たして自から欠き、自から鋭くして自から折れ、自から顯して而して自から咎を招くが如し。豈に之を智と言はんや、實に白知者の所行なり。

必らずしも、吾一身を愛しみて其の吉福を長くせんとの主旨にあらねど、抑も能く眞實の功業を爲さんと欲するものは、功を譲り、業を暗くして、只だ實地の進歩をのみ希ふにあらざれば、何を以て質實の成功あらんや。事を成すとの廣くして且つ大いなる天地に及くものなし。然れども、天地言いふことなく、大勳位を懸くることなく、默々として死せるが如し。而も、四時行はれ、草木茂る、天何をか言いふ、天何をか言いふや。

かゝる愼しみのやう〳〵に薄らぎゆく今の世となりて、獨り古來女の天禀として、生れ乍ら此般の心得はありしものも、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

之すら亦追々に薄らぎ行んとするこそ恨みなれ。たとひ其光の全く跡を沒せずとも、切めては、隱見出沒して奥床しくありたきものなれ。女の騷がしく我は貌して、多言饒舌の淺墓なるほどなさけなきはなく、一々吾が手柄を吹聽して、些細の功名はなしに人の耳目を惹かんとする蓮葉ものこそ、氣の毒なれ。聞くもの皆、爪彈きする氣色も自からは知らざるなど心憂き限りなり。

故に凡そ古來の賢女貞婦に學ばんと欲するものは、既に名あり傳ある變態奇異の婦人をのみ摸範とすること莫れ。此等は寧ろ其の末なるものと見倣して、直ちに其の本源に溯ることを忘る可らず。蓋し古へより外に大事善行を成し遂げたる俊傑の家庭には、是非とも其裏面に内助の人なくんばあらじ。これ人生必然の情實なり。左れば、たとひ、其傳記なくも其の高名なしと云ふと雖も、之によりて其家に其人なかりしなどゝ誤解すること有る可らず。吾等は反つて其の無名によりて大功を察し、婦女子本來の優なる天品十分に隱躍して、男子眞正の元氣となりしものの、其の後へに存することを認む 之を、婦女子が無傳に讀むの傳記とは言ふ。

雜録

細民の現狀

貴族紳士の第や、厩に肥馬あり、厨に、肥肉ありと雖も、翻りて細民の狀態を顧みれば、近來物價騰貴して、其止まる處を知らざるが如く、年豊にして、なほ且つ民に飢色あり、路に餓莩あらんとす。細民の狀態今や甚だ憂ふべし。全國の新聞紙上、下等社會又は貧民窟等の景況を記し、細民困苦の實狀を叙するもの、日一日より多きが如く、社會問題云々の呼聲高きが中にも、貧民問題の一事は、一般の注意を促しつゝあるなり。

◎小作人の狀態

米價騰貴の結果、農民生活の度は頗る進歩し來り、都會奢侈の風、續々山村邑里に輸入せられつゝあること、近年殊に甚しとなす。然れども米穀を賣出し得る程度の中等農民こそ、かくの如くに饒なる活計あり得べきも、小作人の如きに至りて

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は、多くは貧困の狀ありて、昨今蜂起せる貧民暴動中には、現に小作人の一揆も亦尠からざるなり。

◎地方勞働者の狀態

地方の勞働者等は、一般工業の進歩あり、別けては鐵道工事、堤防工事其他の事業起り、賃銀も昨年に比し大方增額せられたれば、これ等に從事する勞働社會の一部は、左したる困難を感せざるが如く、地方通信によれば、先づ概して嚢中豐なるが如し。且つ今春以來諸方に水害起り、東北北越地方幷に關西地方の如きは、再三度の災害を蒙り、田園流れ、家屋潰え、堤防破れ、道路破壞したるが爲めに、此等の修繕に雇使せらるゝ土方、工夫、人足、荷馬車の持主の如きは、賃金增額の爲めに潤澤を蒙れりと雖も、此等はたゞ一部の勞働者にして、旅人の少數、荷物の滋滯等より損失を受くる勞働者もまた尠からず。且つ此等の災害幷に工事あるにつれては、其地方の物價暴騰するが爲めに、高額の賃金ありと雖も、割合に一家の生計の饒かなるには至らず、又た此等の賃錢に生活せざる輩は猶更に疾苦を訴ふべきなり。且つ金儲けの道もなくして、たゞ／＼物價のみ騰貴する地方の貧民は、幸に饑餓を免れんことを祈るのみならん。

地方の勞働者等は賃錢騰貴の爲めに、潤澤を來たせりと雖もこれたゞに一部分だけに過ぎざるのみならず、彼等と雖も、果してこれが爲めに嚢中饒かなりやといふとも疑ふべく、且又目下の大工業の落成の曉、解雇せたる後は、彼等の狀態は如何成り行くべきや、憂ふべきとなきに非ず。今日は一の儲け口ありて、小農民の子弟乃至小職人の子弟までも爭ふて其工事に趣くと雖も、其儲け口なる、素より永續すべきものにあらざるに、漸次落成を告げなば、彼等は再び以前の業務に安堵すべきや。收入多ければ、從つて支出を多くするが爲めに、其一時の儲けの爲めに、貯蓄なし置くなどいふは、彼等小民には稀れなるとにして、且收入多き間は、奢侈を極めて、其餘習は、舊業に歸りたる後もなほ去り難きものあるは自然の勢なり。

●下野佐野町の如きは、近來物價の騰貴せると驚くべく、米價の如きも未曾有の狀態なりと雖も、工業の進歩及道路堤防等の工事あり、殊に足尾銅山工事の爲めに、出稼するもの多く、之によりて細民は左したる困難を感ぜずといふと雖も、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼等は永く此安堵の狀態を維持し得べきや。富山石動町の如きは、目下鐵道布設の爲めに、勞働者の仕事多く、賃錢を得るとも尠からざれば、現今困難を感ずるもの多からずと雖も鐵道全通の曉には、彼等勞働者は如何ばかりの困難を來たすべきやとて、同地方の有志者等は其前後策に就て協議しつゝありて傳ふ。鐵道布設工事中に金儲の多かりし地方にして落成後、甚しき疲弊を來たすとは、今日まで各地に於て實見したるの事實なり。

◉袴を着たる貧民

東京にて四谷の鮫が橋といへば、芝の新網、下谷の万年町と幷べ稱すべき、一大貧民窟なり。然るに此貧窟の人民が、近來は、五圓札を以て買物をなし、また醫師への藥禮をなすと尠からず、如斯きは、是までになき事なるよし。これ蓋し賃錢騰貴の影響に外ならずして、此貧窟にして、此頃は氷店も開け、洋酒屋も始まりて、彼等が得たる賃錢を奪ひ去る手段は段々に開け行くなり。然るに彼等邊には一を得て二を喪ひたるものとすれば、今は二を得て却て三を喪はんとするものなり。されど一時の榮華とはいへ、目下の困苦を感ぜざるが如し。然るに貧民一般に如斯く困難を訴ふると尠しといふべからず、地方至る處に、貧民の疾苦を告ぐるもの多きことと見るべし。而して都鄙一般に薄給の雇人、小商人、下給料の官吏などは、目下甚しき困難を感じて、現に內務省官吏及麴町區役所雇員中、又數ヶ所の郵便脚夫がストライキをなしたるを以てして知るべし。概するに十圓內外の給料にて一家を支持する者等に至りては、刻下家計の困難を訴ふると甚しく、之をや袴を着たる貧民とも稱すべきか。

◎竹槍席旗

現時窮乏疾苦を訴ふる貧民の狀態に至りては、酸鼻すべきもの多く、夏期中の如きも、東京附近の細民は、困難の餘り、青物市場へは持出し難き抄實の西瓜、南瓜、眞桑瓜等を小兒の常食に供し、以て僅に饑餓を凌がしめ居りしと聞きしが彼等は今果た如何ぞや。新潟縣中蒲原郡根本村の貧民は、八月頃は方言「オベクレ」といへるものを採りて食ひしが、後は菱の葉を稗に混じて食せしが、これもやがて盡きしかば、當時は豆の葉、芋の葉、甚しきは柿の葉までも食し居る有樣にて、妻子は離散し、處女の身賣多く、村役場も爲めに困難

を告ぐる有様なりといふ。此等は窮乏の最も甚だしきものなるべけれども、諸物價殊に米價騰貴の爲めに、細民の窮乏疾苦に惱めるは、今日全國一般の狀態なるべし。吁、貧民をして、時日、害か喪びん、予れ女と偕に亡びなんと叫はしむるもの、抑も天の爲す處か、人の爲す處か、思ふて爰に至れば、痛嘆禁すべからざるものあり。彼等は他に訴ふるの道なし、爰に於て乎、竹槍席旗を動して、暴擧に出づる、また止むを得ざるものか。此頃諸方にて貧民の暴動を起すものあり、新聞紙の報導する處によりて、其形狀の二三をいへば、

◎長野縣下伊那郡飯田地方の貧民二千余名は、米價騰貴の爲、九月二日の夜松本商業銀行飯田支店支配人某々二氏の自宅と米搗用の水車場とに押寄せ、暴行を極めたるより、憲兵は發砲し、警官は拔劍して之を鎭撫せしも、一時は非常の騷動にて死傷者數人を出したり。然るにまたゝゝ其翌日の夜三百余人の貧民、飯田警察署に押寄せて暴行をなし、警官拔劍して之を追拂ふ際五六人を斬り、一名の重傷者を出だしたり。飯田憲兵屯所長は暴民鎭撫の際負傷し、暴民中捕縛せられし者七人あり。

◎富山縣下新川郡魚津町の米穀販賣處及び米商の、此頃頻りに蓮出來を買込みたるを聽き、此れぞ米價騰貴の基なるぞと、同町上下獵師町の貧民は、百余名群を成して、各町内の米商宅に押寄せ、米を安く賣らざれば、目に物見せ吳んさと怒鳴り騷ぎたるが、警官の出張によりて、僅に事なきを得たり。

◎新潟縣は近來再三度の水害に加ふるに、虫害ありて、米價俄に騰貴したるか爲めに、貧民の窮苦甚しく、爲めに不穩の狀態も多く聞ゆ。中にも岩船郡關村の如きは、細民等、村役塲に迫りて不穩の運動をなし、新潟市の貧民は、八月廿日に至り、貧民總代の名を以て、市役所に宛て『米價昂騰の爲め、細民活路を失はんとす、依つて此際安米を出して救助され度、若し吾々の請を容れずんば、多人數にて米穀商及び富豪の居宅を破壞せん』との、脅迫的檄文を投入したるものあり。又同市下町邊の漁業者二百餘名も、近頃漁業の利、絕えてなく、殆ど糊口の策に盡きたれば、爲に救助を請ひ、もし聽かれずんば、死を決して爲す處あらん決心にて、甚だ不穩の狀態あり、警官は非常に警戒し居れりといふ。

◎又同縣下覺路津地方の細民は水害の爲、非常の慘狀に陷りたるが爲めに總勢七百人余、救助を願出せんが爲めに中蒲原郡役所に向つて、進行の途中警官の爲に喰ひ止められ、一時非常の騷動をなしたりとぞ。

◎同縣下三嶋郡出雲崎町なる貧家の婦女子百名は本月二十日の夜、同町長の居宅に押寄せて、昨今の如く米價騰貴して、所詮織手を以て糊口すべくもあらざる故、救助を與へよと叫び立てしが、町長の說諭にて一旦引取りしも、翌日またゝゝ押寄せ來りて、苦情を訴へたり。

なほ後報によれば、同縣下は米價非常に騰貴して、一石十四圓二十錢、白米一升十八錢に上りしかば、栃尾町の如きは、貧民日々集合し、四發の砲聲を合圖に蜂起するの約をなしたりとの說あり。また三島郡島崎村の小作人は、納米の減額を地主に請求し、一戶に付一人づゝ晝夜某所に集合し、若し違反せば廿五錢を徵する筈なれども、二週餘日を經るも未だ一人も之を破りしものなく、爲に或は椿事を惹起さんやも知れずとぞ。また東頸城郡安塚村にては村稅滯納の督促を拒むもの百六十名の多きに及べり。

中蒲原郡小須戶町の貧民は、米價一升十六七錢に至れるより、困窮に堪へざるを以て之を七錢に下ぐる樣說諭ありたしと役場に迫り、不穩の狀あり、警官出張警戒して一先無事に鎭靜したり。

◉米澤にては、三品取引所の設置より、米價漸次に騰貴したるに、一時は機業の爲に景氣を維持したりしも、此頃に至りては、細民の窮乏いよゝゝ甚だしくなりし爲めか、何者の所爲にや、米澤市主唱者の名を以て、各機業家及び有力なる商店主人に宛て、脅迫的檄文を配布したるものあり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

此他なほ佐賀、高松、長野、豊橋、北國地方にも、動もすれば貧民不穩の狀ありといふ。然るに爰に注意すべきは、新聞紙は往々虛報を傳ふるものにて、現に去月の府下諸新聞に山形縣北村山郡東根村町附近の窮民一千餘名群をなして、同町なる貴族院議員横尾氏の邸宅を襲ひ、同氏は之が爲めに輕傷を負ひたるよし傳へたれども、同地の實況を聞けば、甞てかゝる形跡もたしといへり。

◎貧民救助

貧民の飢餓旦夕に迫まるの狀あれば、即ち之が救濟を講じて其急を拯はずんばあらず。目下貧民救助を行ひつゝあるよしを傳ふるものは左の如し。

◎例の新潟縣內にては、村上町にては、町費を以て外國米を購入し、米價の下落するまで、元價にて細民に拂下げ、米價の騰貴するに從つて漸次に直に賣下げんさし、柏崎町は、神戶へ外國米千五百俵を註文し、各役場にて、地米より五十錢安價に販賣するとゝなしたり。なほ後報によれば、全縣下一般に不穩の有樣あれば、縣廳にては備荒儲蓄金を以て、蘭貢米五万石を購入すると決して之を依賴し、又各取引所に注意して人爲の暴騰を制し、正米仲買人及び小賣商人にも說諭する所あり、其他各所村會の議決を以て、外國米を購入し、已に着荷しつゝあり。又長岡米穀取引所の如きは、人心の激昂を慮りて、數日間營業を停止したり。

◎富山縣にては、富山市は貧民を救濟さんが爲めに、去月十七日より官にて白米小賣所を設け、一升十二錢五厘にて賣渡したるが當日貧民の集まるもの七八百名の多きに及び忽ち十石程を賣渡したりさ。また同縣下中新山町滑山町の勞力請負會社は、此間より細民八百五十餘戶中五十戶には、無代價にて、八十餘戶には一升に付五錢、百二十戶に付七錢五厘其餘に付十錢の安價にて救助し居れりさ。

◎山形市にては、市會議員、市參事會員協議の上、市內重立ちたる者を勸誘して義捐金を出さしめて、本月十五日より十二月盡日まで、貧民六百戶に對し、十升十錢の割にて米穀を賣出すとに議決したり。

以上は貧民現狀の一斑に過ぎずして、今後なほ物價の下落するとなくんば、彼等の狀態は、いよ〳〵窮乏に陷りて、不穩の形勢も、一層に甚しかるべくして、而して、既に一二の例も見えたるが如くに、官民共同の力を以て、救助の策を講ぜざるべからざるの必要來るべきなり。且つ又文明の趨勢なるが上に、貧民の窮乏今日の如きものは、次第に貧富懸隔の差を大にすべく、貧民問題解釋の必要は、識者の面前に、日一日よりも近く迫り來るべきなり。

おのづからながめやすらんさばかりに
あくがれきつるありあけの月

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

僞善者（下）

曲浦抄譯

莊官が次ぎに尋ねてゆきましたのはマルクスです。このマルクスは、元は相應に身代のあつた商買人でしたが、自分が道樂をした上句、不仕合が續いて、家も藏も人手に渡り、今では食ふや食はずの貧民になり下り、慈悲ある牧師や、二三人の裕な親類の情で、親子共々やうやく其日々々の露命を續いでゐましたが、かやうに貧苦に陷つても、なほ昔の高慢心がうせず、自分を助けて呉れる人より外の者へは、貧苦艱難してゐる事を勉めて隱し、いつも大きな事ばかりいつてをりました。

思ひ掛けない處に莊官の聲がしたので、周章たゞしう立ち上つて、其あたりに散つてゐた襤褸々々の衣類を蒲團の下に押し隱し、丸で裸躰同樣な子供達を叱り付けて、次の部屋に逃げ隱れろといつたに、子供等はオロ〳〵聲になつて訴へました。

『それでもお父さんよ。一寸御覽や。あそこは、いつも雨や雪が降り込むものだから、濕氣てゐるもの。窓に戶もないから寒くてたまらんもの。』

『いけといつたらいけ。仕方のない餓鬼だな。貴樣等はわしを困らすのか。そんな事位の我慢が出來ないのか、この餓鬼め。』

と怒鳴りつけて、無理やりに子供等を次の間に押込み、戶をピツシヤンとしめて、それから何食はぬ顏を繕つて、莊官を坐敷に通しました。莊官が今度、會堂建築に就いての人夫に雇ふからといふ事を聞いて、マルクスは例の高慢心から、

『それでは私はその人夫頭とでもいふ譯なのですか。』

と尋ねました。莊官は又かとさげすみて、

『マルクス、貴樣一躰何を考へてゐるのだ。人夫頭かがすざましい。あたりまへの日傭さ。それが否なら、勝手によすがいゝ。なにも無理になれといふのではないから。』

『そのやうな仕事に不馴ですから、人夫頭でゞもなけや、六ケ敷が、でも殿樣と牧師樣とがお搆の仕事を無下に辭退もしにくいので。』

『ハヽヽ。貴樣が承知して呉りや、殿樣や牧師は、さぞかし

滿足であらう。貴樣によろしく禮をいつて呉いといつて、殿樣がまた余を爰へよこさつしやるだらうよ。』

『實、なにもそんな事になりたいと思ふのぢやないが、正直な所、日傭などにやなりたくないのでして。』

『それぢや貴樣は食ふに困らないのだな。』

莊官は苦々しう問ひかけました。僞善者のマルクスは樣子ぶつて、

『難有い仕合に、是迄食ふに困るやうな事はないで。』

『さうだらうて。處で子供等は何處にゐるか。』

『死んだ家内の妹の處にいつて、今頃は御馳走になつてゐます。』

『さうか、余はなんだか、次の間で泣聲がするやうに思ふたが。』

『イヤ宅には一人もをりません。』

マルクスが何と言ひ譯しても、また次の間で泣聲がするので、莊官は用捨なく、戸を開けて見た所が、丸で裸躰坊の子供等が、半分朽ちた部屋の中で、冷たい風に吹き曝されて、ガタガタと齒の根も合はず、戰慄へてゐるのを見付けて、流石の莊官も之にはあきれ果て、

『オイ、マルクス、此處が即ち今いつた子供等が食事してゐる處なのか。』

と尋ねました。マルクスは折角根膽した事が、ばれて仕舞つて、色は眞青になり、ビク／＼と慄へて、

『莊官樣、後生でずから、此事は誰にも話さないやうにお賴み申します。人に知れでもしたが最後、私こそは、世界中での一番不仕合なものになりますから。』

と手を合せて拜むばかりに、オロ／＼聲に哀願しました。

『貴樣、氣でも狂つて居るのか。早く子供等を出してやらんか。寒いので、手も足も紫色になつてゐるのが、貴樣の目には見えぬのか。わしは宅の犬でもこんな取扱をしたとがない。』

『サア／＼出てこい／＼。莊官樣後生になりやす、誰にもいはないやうに。』

『貴樣はなんだ、牧師の前では、さも信神家らしい顏をしやがつて、この業のつんだ狸爺奴が。前の週に、村の人が道樂だ、怠惰だ、亂暴だなどと牧師に吐かしをつたのは、わ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

りや誰でもない、貴樣だつたぞ。いつかであつた、貴樣は夜の十二時頃に、余の門先を通つて、信神事の馳走があつて、今かへりがけだなんていつたの。』

『莊官樣、ありや全く嘘なのです。あれが虚言ぢやなけりや、首でも差上げます。』

『貴樣は、今わしにいつたとを、余の面前で牧師にいふとが出來るか。』

マルクスは二の言を續ぐとが出來ないで、心の中でモシヤクシヤと悶へてゐるのが、顔の色に見えてゐました。』

『余は今迄この樣な悪人を見たとがない。』

と莊官はあきれかへつて叫びました。これから一時間たゝない中に、この有態を悉皆牧師の宅の料理人に話しました。料理人は其やうに主人に告げやうと約束したので、莊官はなんぼ氣のいゝ牧師でも、最早マルクスに、毎日食物を惠んでやるとはなからうと思つて、内心竊に喜んでゐましたが、思ふ圖は外れて、矢張以前に變らず、マルクスは牧師の恩惠を受けてゐました。元來牧師マルクスが信切深くて、徳義のある者ぢやなど〻、目を眩されてゐて、それで惠みを加へてやるのでなく、たゞ今日が今日にも一家悉く餓ゑ死しさうなのを愍むからでした。

新窓偶語

○緩急の手ごゝろ

なにがし

婚儀を整へたればとて、俄に變じて木石となり得べきにもあらず、薔薇花の妍々として、人の耳目を引くに遇へば、矢張り麗はしと觀ずること昔の如く、時には之を手折んとするあだ心も起るなるべし。有婦の夫の、美人を見てうつくしと言ひ、愛憐すべきものに動されて、いとしと思ふは、必ずしも異むべきに非ず、之を彼是れ、胸に留めて、益なき火焔を燃やすは、野暮の頂不粋の極なり。苟も人の妻たらんものは、此邊のサバケかたなかるべからず。往昔の日、バイロン夫人、この消息に感通せず、その夫を離さゞらんとして却て之を逸し、遂に以太利に走らしめて、破鏡苦惱の歎きを重ね、返へすべからざるの水を覆へせり。されぱとて、男は仲々に放縱横着のものなれば、寸時の間にて、をさ〳〵油斷あるべから

ず。責めらるとも逸し、放たるゝも又逸す。荒れ馬の如き、これ實に男子の特徴乎。故にシェークスピーヤがいひけん如く、男とは、總て紙鳶の如きものなりと心得て、引いては緩め、緩めては引き、常に其つり糸を放すことなき、これ夫を待つの最妙手段ならん。かゝる緩急の手心を得ると蓋し至難のことゝなす。されば一度この心得に達通せば、婦は胸中常に洒然たり、夫は其徳を全うし、同穴の契り、長へなることを得ん。

○毒を救ふに毒を以てせむ

情愛うちに切ならざるに非るも、一時の行違ひ、百萬の波瀾を呼んで、譯もなきことに夫の不興を起し、或は妻の澁顔を買ふことあり。この時に當りて、妻しきりに辭を盡くして、夫の顔を柔げんとし、夫は恭く謙りて、遜讓妻の笑顔に預からんとをこれ計る。而して効果却て顯はれず、夫益々鬼面をつくり、妻愈々澁味を増す。蓋し一小恨事なり。巧言令色を以て慢に賤むべしとなす勿れ。良將はよく敵軍の動靜にかんがみて、始てその兵を動かす。夫、妻を愛して、しかもなほ時に不平の色あるもしきりに之に拘泥して、其悦びを買はんと、女々しき擧動あるべからず、須く炎々たる情熱をうちに隱して、夫の去就、我れに於て何かあらんと、洒落の風相をその表に裝ふべし。これ却て夫をして『我』を折りて、己に近かしむる所以なり。然らずんば益々勢ひに乘じて、その『我』を張り募り、つらき思ひに沈ましむべし。夫の妻に對するも又同じ。妻もし小事に氣を激して、つれなき相を顯ずるも、之を歸へさんとして、説論辨解を試むるが如きは、策の最も拙なるものなり。よろしく天下は女人の日でりならざるが如きを眞似るべし。然らば妻却て色をつくり、夫の憐れみに預らんことを希ふに至らんめり。兎角に人間とは我儘なる動物なりと知れ。

霜百里舟中に我月を領す　蕪村
くろ秋は風ばかりでもなかりけり　北枝
須磨寺や吹ぬ笛聞く木下闇　芭蕉

時文

◎日本女禮式大全　坪谷水哉著　博文館

女子に必要なる諸禮をはじめとし、婦藝の各種をも簡短に述べたれば、座右の友とするによろしく、殊に漆塗金蒔畫の美しき箱に入れ、製本も佳良なれば、淑女達の机上に常に備へてよき飾ともなるべく、また諸祝儀の贈物に最も適當なりとす。

◎書法自在　同

日用百科全書の第二十三編として此書あり、書道に關する歴史由來及古今の說を網羅し、併て斯道に關しての逸事奇談をのせたれば、心得の爲めに讀むべし。

◎紅葉の錦　落合直文 小中村義象 合著　同

卯花月夜の續編として、歴史讀本を合卷したるもの、敦盛、阿新丸、蘭丸、師賢、高德、正成、清正の逸事を美文もて叙述せるものなり。

◎海戰未來の夢　柳井絅齋譯　同

本書は米國海軍のクロウス氏が「マリーローズ號の艦長」と題して、英佛間の海戰に擬して、將來の海戰は如何に發達すべきやとの想像を寫したる小說なり、附錄「日本開戰未來記」は目下の外交問題たる日布談判の破裂して日米大戰爭をなすといふ想像談なるが、米國某海軍大將の著にして、桑港エキザミナー新聞紙上に掲載せられたるものを飜譯したるものなり、これ一の架定談に過ぎざれども、今日米國人の如何に日本人に對して敵意をふくみ、殊に日布談判の何程彼等の感情を害したるかを知るべきものにして頗る注意すべきものなりとす。

◎雪月花　大和田建樹著　同

大和田建樹氏が日頃の漫筆吟詠を收輯したるものなり、文章の友としてよろし。體裁は全く花紅葉に似たり。

◎女界文壇雜俎

◎女子教育問題に就て（成瀬仁藏）　教育公報第百九十九號
◎日本女子大學設立に就て（文明童子）　女鑑第百四十號
◎成瀬仁藏君の女子教育問題を讀む（高角正人）　同　第百四十一號
◎結婚と戀愛と　裏錦第五十九號
◎教育の効果を收めんと欲せば先づ賢母を養成せざるべからず（寺田勇吉）　女子の友第六七號
◎小兒心理學（元良勇次郎）　同
◎家庭の趣味　大日本婦人教育會雜誌第九十六號
◎裸躰美人　都新聞九月十日
◎近時小說に於ける女性（不二行者）　家庭雜誌第百八號
◎比丘尼と看病婦　反省雜誌第十二年第八號
◎東京の尼寺　時事新報九月十日
◎女流思想の低下　家庭新聞第十三號
◎女性の修德（豐崎善之介）　婦人新報第五號
◎婦人につきて（留岡幸助）　仝
◎婦人と赤十字　日本赤十字第五十三號
◎女性の美德　反省の鏡第二年第七年
◎女子大學は絕對的に不必要なり（竹内楠三）　日本宗教第五號
◎吾曹また寺族の婦女の自覺を促す　教友雜誌第二百八十七號
◎僧侶妻帶に關する件（河合日辰）　同
◎台灣に於ける女子教育（椋本龍海）　傳燈第百五十號
◎女子教育に於て（下田次郎）　越佐教育雜誌第五十七號
◎家庭と音樂（かをる）　土陽新聞九月廿八日

◎未讀の書◎兒童研究　（久津見蕨村著）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

◎日本主義　の竹内某、女子大學は絶對的に不必要なりと論ず、其理由とする處は、歐米に於ても高等女子教育の弊害を感じつゝあるに、今又之を我邦に輸入せんとするはあやまれり、女子の智識は、たゞ國家の生存發達の適當の位置にあれば可なり、女子はこの社會國家に對する任務上決して大學程度の如き高等なる教育を受くべき者に非ず、之れ却て無益有害なりとして、成瀬氏の擧を嘲笑す、所謂日本主義の女子教育に對する意見果して如斯とするか、狹量偏見素より顧みるに足らず。

◎女鏡　何が故ぞ絶えず日本女子大學校反對論をなし、成瀬氏を野心家と稱し、不愛國者とのゝしり、而して自ら高うして、愛國の至誠ある者といふ、自ら尊くするものは、必ず卑くせらるべし。彼人を罵りて、歐米に心醉するといふもの、自らはまた偏見迷想裡に彷徨するもの彼等は決して共に公平なる教育をいふに足らず。彼等如何に呶々するも、大勢の進歩を如何ともする能はず。所謂自稱愛國者の偏狹徒は、恰も廻轉盤の上に立ちて、空を仰いで猶々怒號するもの〻如く、不知不識の間に己が立場の移轉して、舞臺は旣に一變するに等し。([illegible])

◎此頃　女子教育論の多き、殊に其地方に在りて流行する、また婦人論の多き、大勢の存する處を見るべし。然れども彼等に於て一も斬新なる說を聞くこと能はず、いづれも皮相說の燒きなほしに過ぎざれども、なほ女學界の爲めに此風潮あるを喜ぶ。

◎女子教育　あるの前に女子に宗教を與へよと、反省の鏡てふ佛教婦人雜誌はいふ。何ぞ教育と宗教とに先後を附するや。

◎佛界　の男女雜誌近頃の有樣を見たるに、いづれも書生的の空論に流れて、此有力なる宗教を奉じたるものより、經驗の智識と敬虔なる靈性とより出づるもの稀なり。信を去りて論に就く、佛界の爲めにとらず。

◎工場條例　の事目下の議論なるが、其如何に制定せらるゝや未だ知るを得ざれども、其女工に關する條目に就ては、特に審慮あらんことを望まざるを得ず。

◎臺灣彰化に　佛教的一女學校を創設したる榛本龍海氏曰く、土人等は女子の教育は、女兒に教ふるに日本語を以てして、他日學校卒業の上は、日本人に配偶せしめ、日本へ送る目的なり、などとの風說訛傳を迷信するものありと。

◎『宗教』　曰く要は先づ今日の卑屈なる我國の女性をして、自信自重の精神を抱持せしむるに在り、而して次には男子をして女子が玩弄すべき附屬物に非ずして尊敬すべき伴侶なることを悟らしむるに在り、在來の諸宗教よく此の任務を完うし得べきや、否たゞ基督教のみ之をよくすと。

◎佛國　にて猫に一万弗の遺產を讓りたる一婦人あり、其遺產猫より傳はりて、一大學の所有となる、遺產分配の事、爰に至りて奇を極むといふべし。

◎十月二十三日　より二十五日に至る三日間東京帝國教育會講堂に於て、全國聯合教育會の開設せらるゝに就て、多くの地方教育會より提出したる議題中、各府縣に一の高等女學校を設立すべきの法律を定むるの可否如何との條目を立てしもの尠からず。されどこの問題は、同大會の議題には入らず。

◎櫛、笄、簪の流行

儀式用櫛、笄、簪　櫛は無地鼈甲中京大形物、笄は兩角無地又は胴入、差込は松竹梅、菊、牡丹、花寄等種々の花鳥彫(但し花は一對又は一本或は花さし等にて思ひ〱に用ふ等)最も流行せり、其價は頗る區域廣しと雖も先づ普通櫛、笄にて四五十圓位を中等とす、近來世俗段々贅澤に流れ、中等以上の品大に賣行きを增せり、又馬爪卵甲等廉價なる摸造品も賣行惡しからず、其直段は最上の品櫛笄にて八九圓位なり。

儀式用後差類　は無地鼈甲祇園形絲打差込(花付、花模樣は大略前同樣の種類一對又は一本を用ふ)流行す、其價は花付一本七八圓を中等とす、之に次ぐは花向差、平打彫刻或は金銀平打等にて花向差平打彫刻は代價五圓より、十圓平打は金にて二十圓銀にて二圓前後なり。

丸髷差　は無地鼈甲中京形櫛、角形中差、其價は大略十五圓位を中等とす、摸造品は最上三四圓位なり。

後差類　は平打或は松葉形鼈甲足に玉入類を用ひ、玉は珊瑚珠、瑪瑙、象牙又は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

金地蒔絵芝山彫入（貝象眼彫入）又は金屬彫刻象眼堆朱等にて、珊瑚は五分玉にて二十圓、前後珊瑚は七八圓、象牙及び金地蒔絵等は三圓より五圓象眼堆朱は一二圓位なり。

常差類　は無地鼈甲の中京形櫛、角中差は相變らず流行す、之に次ぐは政子形の櫛、面取中差とす、斑布又は蒔絵類にては矢張政子形の櫛、面取中差等最も流行す、蒔絵は金地高蒔絵或は彫付金地蒔絵、金地芝山彫入等の種類にして、代價は大概十圓位を中等とせり。

蒔繪簪　は黒鼈甲臺彫刻蒔絵平打丸玉金地蒔絵、芝山彫入、研出し等にて、代價は二三圓位なり。

はる〴〵と二村山を行きすぎて
なほすゑたどる野べの夕やみ

時報

◎皇女御降誕

九月廿四日を以て皇女御降誕あり、御生母は小菊内侍園典侍にいます。多喜子と命名せられ貞宮と稱せらる。

◎栃木の貞女　栃木縣那須郡蘆野町大字蘆野新町平民小山田龜五郎の妻松と云へるは、同町大字横岡なる某の娘にして、今を去ること三十年前龜五郎の妻となりけるが、元來此の龜五郎と云へるは大酒の上に癖惡く、幕政の頃は蘆野藩の足輕を勤めて、銅金作りの木刀に腕を叩いて粗放を極めし習慣の性とやなりけん、萬につけて荒々しく、動もすれば女房を取つて押へて打擲し、剰へ戸外へ引ずり出すなど亂暴甚だしき行ひあるも、松は露ばかりも恨みと思はず、只管本夫の心を和げんとて龜五郎が酒に漬れ醉に眠るまで門の外に立盡し、竊かに戸を開きて内に入り、翌日の炊事の支度より、偖ては夜業の賃仕事まで、夜の目も合さず立働らくこと珍らしがられば、四隣の者等は世にも稀なる貞女なりと語り傳へて、感歎せぬはなかりしと。去る程に明治十一年の頃龜五郎は中風症に罹りて、身体の自由利かざるのみか、言語さへ思ふがまゝならず、ひたと床に就くに至りしが、左らぬだに一徹短慮の龜五郎とながら狂人の如く、床の上にて煩悶狂亂、喚き叫ぶを松は更に厭ふ様子もなく、日夜看護に心を碎くものから、家素より貯蓄あるにあらねば、醫藥の代は云ふに及ばず、三度の食事も思ふに任せぬ所より、松は人に雇はれて薄き賃銀に身を削るまで立働き、或は繩を綯席を織るなど、夜を日に繼いで稼いでは、僅かに得たる賃銀もて、夫の病を平癒させんと、自身は食事も碌々せず、身命を擲ち肝膽を碎き奉養到らざる方なきを、猶ほ慊然でや龜五郎はあらゆる難題を並べては癇癪を起し、不自由の身ながら、杖を飛ばして亂打するなど亂暴を極むるもの畢竟わが奉養の足らざる故と、松は只管わが身を責めいよ〳〵益す貞實を盡すこと茲二に十年、終始一貫の苦節は毫も衰ふることなく、其の筋にても奇特を賞し、八月十六日附を以て金子二圓に左の賞狀を添へて下賜したりといふ。

那須郡蘆野町大字蘆野
小山田まつ

資性貞實明治十一年其夫龜五郎中風症に罹り爾來起居自由ならず嗣子幸作は常に妻子を携帯して他に力食し其家計を補助するに足らず家道日に究乏に陷り飢餓騷迫るに及びし然れども能く意を勵まし勞役傭作に服し僅に糊口の資を得て病夫に奉事し承歡怠らず二十年一日の如し洵に奇特とす仍爲其賞金二圓を下賜す

明治卅年八月十六日　栃木縣知事　江木千之

◎孝女表彰　讃州那珂郡本島村の八田うの女は多年孝養を竭せし廉を以て、本月十日賞勳局より左の如く特例金圓を受けたり。

香川縣讃岐國那珂郡本島村八田權四郎二女
八田うの

資性孝順年甫めて八歳其母惡疾に罹り兩眼明を喪ふや幼弱の身を以て獨力看護藥餌を進め臭汚を淨め日夜怠らず父衰老して生業を營むこと能はざるに及び餘力賃作して家計を支持し二十年の久き孝養一日の如し洵に奇特とす仍て其賞金二十圓下賜す

◎臺南縣の美術陳列場　磯貝臺南縣知事は此程上京の序を以て神田一橋外なる共立女子職業學校に於り今度同縣下に美術品陳列場を興し、土著の婦人を導き、傍ら日本語學教授の一助として既に設立の運びに至りたればとて、編物類各種一點づゝ及びテーブル掛け一枚、扇面諸種の圖畫等合計四十三圓餘の物を買入れ、尚ほ優美なる造花二十圓、土人向きの花簪二十本（代價五圓）及び岩に孔雀の縫取ある額一面（代價二十五圓）等を注文したるより、同校にては取急ぎ製造に着手し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たるよし。

◎愛媛教育協會の建議　愛媛教育協會は去頃總集會を開きて、教育施設に關する數請願の中、尋常師範學校に女子部を再興することを建議す。

◎新潟教育會の高等女學校新設案　新潟縣教育會本年七月第六回議員會は高等女學校設置外四件を可決して縣知事へ建議したり。其高等女學校新設理由とする處は、既に師範學校女子部ありと雖も、以て子女の中等教育の渴望を滿すこと能はず、西比利亞鐵道成らんとし、内地雜居既に近きにあり、爲めに日本海は世界視線の集る處となり、北越沃野は四方人士の角逐場ならんとす、今日に於て女子の中等教育を計畫して、他日新世紀の活世界を馳騁する國民を補助し家庭を治むるものを養成するは實に今日の急務なりとするに在り、新設位置は新潟にして創設費金二万二千五百圓、一年經常費四千九十圓の見込ありといふ

◎京都佛敎婦人會　京都淨土宗有志者の發起にて、先般京都に起りし同會は、會長に善光寺尼宮久我公を推戴し、一般貴婦人之を贊助し、會員多く、また婦人を教化して、法味を霑らしむるに在とす。既に七月來會員を集めて、毎週一回布教しつゝあるが、今月十日には其開會式を擧ぐるよし

◎共立山梨女學校　同校の目下の狀況は生徒三十余名、内十名程の寄宿生あり、課目の重なるものは、裁縫にして、刺繡、讀書、習字、挿花、茶の湯等之に次ぐとぞ。

◎パリッシユ孃　万國婦人矯風會第七回世界巡回委員クラヽ、パリッシユ孃は、東京禁酒會評議員美山貫一氏と共に、本月二十日北海道に赴きて、禁酒矯風の傳道をなすといふ。

◎日本弘道會婦人部　にては本月三日集會を華族會館に開き、南摩副會長の講演あり、同時に評議員の改選を行へり。

◎工女教育　泉州堺紡績會社にては、本月初旬より女教師を聘し、裁縫及簡易なる女禮式等を科目とし且十日毎の晝夜交代日には娛樂となるべき催しをなし、其都度新に購入したる幻燈を示し衞生、修身等の談話をも聽かしむる事となせりとぞ。

◎滋賀縣私立高等女學校　滋賀縣教育會に於て大津に設立せる私立高等女學校の事に就ては前號にも報じたるが、いよ〳〵來年度よりは大津町立に改め、規模を擴張するよし。

◎女子高等師範學校新入學生　にては九月十日師範學科補欠生十一人、家事專修生二十五人及保姆練習科生十一人の入學を許可したり、

◎千島移住の婦人　郡司大尉等の報功義會員となりて、千島に赴きたる婦人子女は、今は元氣よくその業を勉めて、主として農耕を掌り、夜間は業務の暇を以て、學校に集會し、普通學の外裁縫、衞生、產婆學、看護學などを講究すといふ。

◎日本赤十字社病院船新造　赤十字社に於ては諸社の大準備中、海上に於て患者輸送の必要に備ふる爲病院船二艘を新造することに決し、出來上り次第之を日本郵船會社の船籍に附して、以後二十ヶ年間毎年築造費の二十分一を赤十字社に納付せしめ、平時は郵船會社に於て自由に使用することを得るものとする由。構造は英國に於ける病院船をも參考して、英國の造船會社に注文するものにして一隻の築造費九千万圓、二隻にての總噸數三千六百噸なるよし。而して此船は明年中には出來上り本部に廻送し來る者といふ。

◎赤十字社外勤看護婦　日本赤十字社養成の看護婦の冗員を動し、かつ外方の需用に應ぜんが爲めに、不日看護部を設け、本社病院内寄宿舍を設けて、其外勤看護婦の品行を監督すべしといふ。

◎日本赤十字創立後二十五年　明治三十五年五月三日は、日本赤十字社創立滿二十五年紀念日に相當するを以て大紀念祝典を開き、ヂエチバ府万國中央社長以下各同盟國の社長及書記長をも招請するの計畫なりといふ。

◎帝國大學附屬醫院看護婦及產婆生徒募集　帝國大學附屬醫院看護婦養成所にては、今日產婆生徒四十名、看護學見習生五十名（内四十名官費自費十名）を募集する由にて、應募資格は產婆科は二十二歲以上、看護婦は官費生は二十五歲以上三十五歲以下のものにして獨身者に限り、自費生には制限なし。因にいふ目下東京の女子には一般に看護婦の需要を增加し來り、殊に此頃は流行病などの爲に猶更缺乏を告ぐる有樣にて、市内多數の看護婦會と稱するものも、看護婦募集に汲々たる狀あり。之が爲めに却て新に看護婦を養成するに若かじとなして所々の病院にて、看護婦生徒募集を始めたる向もあり。

◎下婢の拂底　人物の拂底は何處までも同樣にして、下婢の一二年來外部に缺乏せるが此頃に至りては殊に甚だしく、給料の如きも一ヶ月二圓以上に達して、なほ應ずるもの乏し、これいふまでもなく、工業の發達と風俗の腐敗とが大に影響せるものなり。物價の騰貴家賃の增加、下女の給料昇額、如斯にしては中等以下の家庭にては、下女を雇使することは六ヶ敷なり、あたら學者の細君を、台所に出してつぶし物にすることは自然の勢なるべし。

◎保姆練習科第一回卒業生　女子高等師範學校に於て昨年十月募集したる第一回保姆練習科生徒の卒業式を本月四日同校に擧行し、式場に於て學校長の告辭文部次官の演說等ありしよし卒業生總數十三名。

◎遺產壹万圓を學校に寄附す　山口縣大津郡の豪農山田與三郎氏は不幸肺炎に罹り、此程死去したるに死に臨んで遺產一万圓を郡内三高等小學校基金に分納寄附すべきことを遺言したりといふ。

◎大日本婦人衞生會演說　本月九日午後一時より一ツ橋外帝國教育會講堂に開演し、醫學博士三浦守治、警察醫長山根正次兩氏出席して目下赤痢病流行の折柄、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

最も必要なる演說ありしよし。

◎伊勢山田女學校　伊勢宇治山田町有志者の計畫にかゝる山田女學校は、愈々大世古町瀧直光方に設置する事に定まり、來十一月より開校すといふ。

○海外女界

◎世界婦人矯風會幷に米國婦人矯風會の役員　世界婦人矯風會役員は會頭ミス、フランセス、ウイラード(米國イリノーズ、イヴアンストン)副會頭レデー、ヘンリー、ソマセット(英國倫敦フアーリンドン街紀念會)通信書記ミス、エ、スラック(英國デルヴイシヤイア)書記補ミス、アナ、エ、ゴルドン(米國イリノイズ州イヴアンストン)會計ミセス、メリー、イ、サンダーソン(英領加奈多クエベック州ダンプイル)なり。また米國婦人矯風會役員は、會頭ウイラード、副會頭ミセス、エル、エム、エム、ステヴエンス(米國メイン州ポートランド)通信書記ミセス、カザリン、ステベンソン(米國シカゴ市テンプル)記錄書記(ミセス、クラ、シー、ホッフマン(米國ミッソリー州カンサス市)記錄書記補ミセス、エフ、イ、ヒイチヤンプ(米國ケンタッキー州レキシントン)會計ミセス、ヘレン、エム、バアカー(米國シカゴ市テンプル)なり。

◎米國婦人矯風會の上海領事任命非難　米國政府は今般米國ミチソタ州のジョン、グードナウ氏を、上海總領事に任命したる處、同氏は嘗に離緣事件にて出訴せられ、遂に敗訴したる程の敗德男子なるを今此官位に命ずるは國家の體面を汚すものとなして、ミチソタ州の多數婦人は之が爲めに反對運動を起し、遂に米國婦人矯風會より、大統領及上院に發電して、本件につきては再三熟考あるべき旨請願したり。

◎露國皇后と人民の自由　露國皇帝は昨年のクリスマスに皇后に向つて今日の祝儀に何なりとも一の願を許すべし申出でよとありし故、皇后はさらば信教の自由を人民に許可あれと申されしが、皇帝は悉く之を許可せられざるも、此程、露國正教派のものと非正教派のものと、結婚する場合には、其出生の子には正教の洗禮を受けしむとの誓言をなさしむてふ命令を廢止されたりといふ。

◎米國マッサチユセッツ州の女子學校教員　は目下二百十五人なりといふ。

◎女子の大學教授　米國ミシガン大學評議員會にては、學制を變更して女子に教授講座を與ふるに決し、またデトロイトにては、女子の大學教授講座を設けんが爲の運動起り、之を要する三万弗の中、半額は既に醵集せられ、中一万弗は、女權擴張に熱心なる一富豪の寄附にかゝれり。

◎以太利の教育ある女子　以太利には小學校五ヶ年卒業後女子師範學校に入り、四ヶ年にして、小學正教員となるの證書を得るものにして、大概の良家にては、家計豐かならざるを以て、其子女の万一良緣を得ざる場合を計りて、獨立の生活を營むに足るの教育を受けしむるものゝ如し。然るに元來貧國なる此國にては、女子教員の需用は、供給以下にありて、從ふて競爭多く、薄給にて奉職せざるべからず。また中學大學に入學する向も尠からず。然れども女權一般に低下にして、曾て女子にして、大學法科を卒業して、辯護士となりしものありしに、チユリン辯護士會は之が入會を排斥したる爲めに、實際職務を行ふ能はざる次第となりたりとぞ。概するに以太利の女子教育は輓近二十年間に著しく進步したれども、社會の教育ある女子を需要すると割合に多からず、家庭教師の如きも、富家は概して、外國婦人を雇ひ入れて、本國の女學者に信を置かざるの風ありといふ。要するに同國の女子は大抵無識無學迷信頑陋にして、相當の教育あるものと雖も、學問の趣味に乏しく、好むで家事を賄ひ外事に預るを欲せず、一旦人に嫁して妻となり母となるや、乍ち其得たる才識學問を拋ちて顧みずといふ。

◎スペイン國女皇の慈惠　此程の事なりとか、スペイン國女皇陛下には、馬車にて御啓御の砌り、一人の乞食婦人が、救貧願書を馬車に投げ込まんとして、誤つて馬に蹴られたるに、陛下は忽ち玉座を降らせ玉ひ、其乞食を抱き起し、侍從に其旨を傳へて之を托してなほ翌日親しく病院に訪問し、許多の金員を惠ませ玉ひしとぞ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

陸軍藥劑監従六位勲四等石塚左玄先生著

化學的食養長壽論

全壹册洋装美本卅五字詰十四行紙數五百六拾頁定價壹圓五拾錢郵税拾貳錢

地形天候の異なる我國人は歐洲人の如く肉食に多く必要なき其理其證あると我國民が此食養法に依れば其調理法も善良となり十中の八九は言行一致して自他安全に高身壯實に體力健勝に智多才優に無病長壽に攝養し得殊に兒童にありては體育智育才育は即ち食育にして未來の體質大小健弱壽夭の標準程度を能知する近時無類の一大珍書なり

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　大阪市東區備後町五丁目　盛文館

芙蓉峰第十八號（明治三十年十月廿日發行）

○芙蓉の雪

聖書の靈的研究を論ず……山月子

○寒梅の林

儒教一派の人生觀に就て……田修理

○春野の草

友情の絆……玉葉譯

ヨナタンとダビデとの圖を見て……巨泉

○シオンの月

押川先生説教摘錄……

○晴夜の露

程明道行狀拾遺……矢洲

京城學堂最近報告……

○其他

先哲の逸事金言○及び雜報等

○附錄ゆふべの露

發行所　仙臺市東八番丁四十一番地勞働會内　芙蓉社

東京裁縫女學校長渡邊辰五郎著

裁縫教授書

全參册　定價金壹圓

取次販賣　東京麴町下六番町　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社會雜誌

十月刊行

（要目）

社會政策講究の必要　社說
三大悪閥　社說
政客の價値夫れ幾何ぞ　社說
勞働者保護の理論及政策　論說
產業組合論　論說
職工衞生調査資料（十頁餘に渉り極めて精細の記述なり）
婦人社會の研究（各地女風俗の研究を促すもの）
勞働所の來歷及び現況（普魯西亞を始め歐州諸國の勞働所を叙す）
工塲條例の趨勢（十頁餘に渉り、其名稱より當業者の運動、制定の必要と反對、之に對する希望及其遇行等九項に分ち三十餘種の時論と運動を網羅し委細に評論せり、之に關する事情殆んど盡さゞるなし、識者の一顧を煩はす）
貧民狀態の傾向（目下生活困難なる種類は何か、農民と一部の勞働者、其將來の困難、各地方貧民騷動の狀況、各地貧民救助の狀況、貧窟探究等六項に別ちて其傾向を叙す）
一脫半語（政治界、一般社會の時事問題を評論せり）
同盟罷工の趨勢（十一種の原因結果を叙す）
社會論壇（社會學、社會主義、社會問題、其他、社會雜誌上に論議する如き諸誌上の細目錄を揭げ一目時論界の形勢を知らしむ）

次號には、勞働社會の形勢。雜誌社會內幕の續稿○貧民問題。勢働時間及び年齡。土地兼併及び賣買○各地慈善會狀況。犯罪及監獄問題あり。其他、社說、論說等を載す

定價一册十錢郵稅五厘、六册半年分郵稅共六十錢一年分壹圓十五錢。本誌は一切前金に非れば注文有も發送せず

發賣元　麴町區下六番町六番地　社會雜誌社

發賣所

日本宗教評論　宗教界の評論

日本宗教

第三卷十月　第二號十日

日本宗教

加藤博士と雲照律師　巖本善治
聖賢千古の教訓　巖本善治
風紀振肅　戶川殘花
法士朝夜の勤行　青柳猛

纂錄

基督教會の時論　落花淡八
管見漫語　圓環子
滴々　殘花

潮勢

同志社問題○僧侶撿定試驗の眞相○內地雜居と佛教徒○轉信と轉派と○基督教會の三潮流（福音新報）○宗教は茶の如し（時事新報）○基督教の大教義（內村鑑三氏）○僧侶妻帶公默二許の利害○各地方宗教事情（鳥取、丹後宮津、札幌、伯耆境、讃岐高松、野州宇都宮、越後直江津、肥前佐賀、常陸水戶、伊勢山田、安藝廣島、丹後鶴舞、三河豐橋、函館、仙臺、小樽等の諸地方）

紹介

宗教世界○教道會報○眞宗新報○教濟新報○佛教、基督教、文學政治社會上の新刊雜誌目錄

彙報

神社寺院幷に宗教法○眞言宗の教師○火葬增加○觀潮斷片

定價一册十錢郵稅五厘六册半年分郵稅共前金六十錢一年分壹圓十五錢

發行所　麴町區下六番町六番地　日本宗教社

明治女學校義捐金
第十一回報告

明治女學校義捐金

第十一回報告

金五十圓	山梨縣	櫻井勉殿
金百圓	同	渡邊信殿
金五十圓	同	新海榮太郎殿
金三十圓	同	佐竹作太郎殿
金三十圓	同	林紋二郎殿
金二十圓	同	根津一秀殿
金十五圓	同	穴水朝二郎殿
金十五圓	同	依田道長殿
金十五圓	同	中澤仁兵衛殿
金十五圓	同	生原忠左衛門殿
金十五圓	同	奥山源造殿
金十五圓	同	森國造殿
金十五圓	同	雨宮五郎殿
金十圓	同	雨宮廣光殿
金十五圓	同	早川善太郎殿
金十五圓	同	杉山三四郎殿

進歩黨々報

第十一號（十月一日發行）○毎月二回（一日、十五日）定價一冊七錢○六冊（三ヶ月分）前金四十錢○十二冊（六ヶ月分）金七十八錢○二十四冊（一ヶ年分）一圓五十錢不要郵便稅

論説 所謂御役所風を一掃蕩すべし（志賀重昂）税源の新案（清水隆德）**政務資料** 重要歳入累年增減比較表（地租○所得稅○酒造稅○煙草稅○醬油稅○海關稅○免許手數料○森林收入○郵便電信收入○鐵道益金○預金利子繰入）營業稅法改正に關する資料 **寄書** 沈默の雄辯（德富蘇峰）經濟上に於ける國家的經營（阪谷芳郎）評論 新聞紙の近今◎小八件◎新著批評◎政治家の怯懦（島田三郎）雜錄 英國女皇の議會◎和歌◎短褐筒袖と寛衣長袖 外報 布哇に於ける米布合併合併と韓廷の傭兵問題◎外九件 經濟事情 八月中の貿易◎圓銀通用禁止令◎外九件 黨報 我黨の近情◎岡山遊說の光景（下）秋田巡遊日錄（沼田雪窓）◎竹內代議士の報告會◎埼玉縣第三、第五區の補欠選擧◎黨員の去來 時事 政界の近情◎嗚呼子康を憶ふ（福島悅次郎）◎時事日記

發行所 東京麹町區內幸町一丁目三番地 進歩黨々報局

社告

本誌今回各地方婦女の風俗に關して大方諸氏の報告を求む、其調査項目委細は前號女學欄內を見るべし。

女學雜誌一手大賣捌 東京神田區表神保町 東京堂

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可